令和８年度流山市平和大使

「平和大使として学んだこと」

作文集



都心から
一番近い
森のまち

流山市
Nagareyama City

この作文集を手に取ってくださったみなさんへ

　私たちは、「令和８年度流山市平和大使」に選ばれた小学５・６年生４８名です。

　平和大使として、８月５日から８月６日の２日間で広島市を訪れ、市民の皆様からお預かりした千羽鶴を広島平和記念公園に献納したほか、６日に実施された広島平和祈念式典に参加し、原爆死没者に黙とうを捧げてきました。

　また、平和記念資料館を見学したほか、第２回全国こども平和サミットに参加し、原子爆弾の恐ろしさや悲惨さ、現在もつらい思いをしている人の存在などを知りました。

　平和大使の任務は、ただ平和について学ぶことだけでなく、広島で学んできたことを多くの人に伝え、これからの平和を守り、創っていくことだと思います。

　この作文集は、その第１歩として、平和大使として広島に派遣され、現地で聞いて、感じて、考えてきたことを、４８名それぞれが自分の言葉で文章にまとめたものです。

　この作文集を手に取ってくださったみなさんも、私たちと一緒に平和について考え、平和への思いを次世代につないでいってほしいと思います。

　私たちの作文が、その助けになったらうれしいです。

令和８年度　流山市平和大使

◆目次

・作文「平和大使として学んだこと」　１ページ～６４ページ

				ページ
１班				
広島県で学んだことと僕の役割	流山小学校	５年	安達　湊士……	１
これからの私にできること	小山小学校	６年	大塚　佳恵……	３
初めての言葉に出来ない気持ち	長崎小学校	６年	小笠原　陽一朗……	４
２日間広島に行って知ったこと	東深井小学校	５年	菊池　朝陽……	６
私たちが受け継ぐこと	八木北小学校	６年	根田　藍里……	７
当たり前の日常の大切さ	おおたかの森小学校	５年	松本　侑樹……	９
２班				
平和な世界を作るために、今、ぼくにできること	長崎小学校	６年	赤羽　琉珂……１０	
平和のために自分たちができること	南流山第二小学校	６年	川原　新心……１１	
未来へつなぐ平和のバトン	小山小学校	５年	城澤　奈由華……１２	
平和への想い	向小金小学校	５年	杉本　陽奈子……１３	
未来の平和のために	おおぐろの森小学校	６年	豊川　楓……１５	
ぼくが広島で学んだこと	おおたかの森小学校	５年	平井　瑠偉……１６	
３班				
ヒロシマ	東深井小学校	６年	鎌田　悠生……１７	
平和のためにやるべきこと	市野谷小学校	６年	工藤　陽……１９	
原子爆弾の恐ろしさ	南流山小学校	６年	小出　峻輔……２１	
ぼくたちにできること	小山小学校	５年	鈴木　創二朗……２２	
戦争なんて幸せをうばうだけ	長崎小学校	５年	髙橋　美輝……２４	
平和を望む	鰭ケ崎小学校	５年	山田　あかり……２５	
４班				
かけがえのない「あたりまえ」	小山小学校	６年	貝瀬　華……２７	
僕の見た広島	おおたかの森小学校	６年	小林　輝希……２８	
私の平和大使としての使命	長崎小学校	５年	佐藤　悠乃……２９	
平和への道	江戸川台小学校	５年	滝沢　旺佑……３１	
僕が見た広島	八木北小学校	５年	野口　遊宇……３２	
平和大使を終えて	向小金小学校	６年	藤巻　伸之助……３３	

※班ごとに氏名の五十音順で掲載しています。

５班　　ページ
平和大使の活動を通して感じたこと　東小学校　６年　我妻　奏輔……３４
今も生まれている決意　東深井小学校　６年　川上　紗季……３５
あの日の原爆　流山小学校　６年　砂川　就仁……３６
平和大使として、未来へつなぐバトン　小山小学校　５年　西野　澪央……３７
世界の人々と生きる　長崎小学校　５年　山崎　朝夏理……３８
戦争はダメ。原子爆弾は恐ろしい。　おおぐろの森小学校　５年　山田　梨乃……４０

６班
平和大使として学んだこととこれから　東小学校　５年　酒寄　逞助……４１
ヒロシマの心　長崎小学校　５年　佐野　遥真……４２
ぼくの平和への思い　南流山第二小学校　６年　社本　志信……４３
本当の平和　おおぐろの森小学校　５年　恒成　海結……４４
世界の問題　核兵器廃絶に向けて　向小金小学校　５年　平野　絢人……４６
争いのない世界のために　小山小学校　６年　藤井　雪乃……４８

７班
僕が平和についてできること　東深井小学校　５年　井上　伊集……４９
戦争が一切ない世界を願って　鰭ケ崎小学校　５年　田口　実瑚……５０
僕の考える平和　小山小学校　５年　中森　陽……５１
「平和」の本当の意味　長崎小学校　６年　西嶋　悠真……５３
平和大使を終えた今、私が思うこと。　南流山小学校　５年　細貝　朋香……５４
核のない平和な世界を目指して　市野谷小学校　６年　山口　翼……５５

８班
平和は誰が何をすれば作れるのか　おおぐろの森小学校　５年　小矢　穂尚……５６
広島で学んだ戦争のこと　小山小学校　５年　坂本　実優……５７
伝え聞く原爆が私に語るもの　江戸川台小学校　６年　常木　咲良……５８
平和への道　おおたかの森小学校　６年　戸部　芙美……６０
「平和」について改めて考えさせられた平和大使　流山小学校　６年　中村　寿太朗……６２
今を生きる私たちができること　八木南小学校　５年　松尾　知薫……６４

・令和８年度平和大使活動報告　６５ページ～６９ページ

・流山市の平和に関する取り組み　７０ページ

「平和大使として学んだこと」

広島県で学んだことと僕の役割

流山小学校　５年　安達　湊士



１９４５年８月６日、アメリカ軍が広島県に原爆を落とし、一瞬にして数万人の命が犠牲になりました。平和な日本に生まれた僕にとって、広島県に行くまでは想像もつかない世界です。僕はゲームが好きで、武器を使って敵を倒すゲームをしています。僕はゲームが好きですが、人と人が殺し合う世界が本当にあるとは夢にも思いませんでした。

しかし、平和記念資料館に行ってみると、そこには知らない世界が広がっていました。例えば、結構離れている場所にもドカーンという音がして、振動がきたということを聞きびっくりしました。なぜかと言うと、たった一つの原子力爆弾だけでそんなに威力があるとは考えられなかったからです。もしも僕がその場にいたら、パニックになってしまって何も行動ができなかったに違いありません。

さらに驚いたのは、丈夫そうな路面電車が６４台あったのに、たった一つの原子力爆弾でそのうちの６２台が吹き飛んでしまったことと、広島県に行くまでは想像もつかない世界です。僕はゲームが好きで、武器を使って敵を倒すゲームをしています。僕はゲームが好きですが、人と人が殺し合う世界が本当にあるとは夢にも思いません。

しかし、平和記念資料館に行ってみると、そこには知らない世界が広がっていました。例えば、結構離れている場所にもドカーンという音がして、振動がきたということを聞きびっくりしました。なぜかと言うと、たった一つの原子力爆弾だけでそんなに威力があるとは考えられなかったからです。もしも僕がその場にいたら、パニックになってしまって何も行動ができなかったに違いありません。

を、家族や友達に話すことです。色んな人に知ってもらい、戦争のない平和な日本がどれだけ素晴らしいものかを実感してもらえるよう に行動していきたいです。一日一日を大切にして、平和大使としての役割を果たせるよう に頑張ります。

「平和大使として学んだこと」

これからの私にできること

小山小学校　６年　大塚　佳恵



「平和大使」を終えた今私が伝えたいことは、過去の恐ろしい現実に目を背けずに原爆について知ってほしいということです。私は平和大使になる前までは戦争についての本などを読んで自分から知ろうとしませんでした。しかし、平和大使になって現地で被爆者の遺品や当時の写真を見て平和に対する考え方が大きく変わりました。

八十一年前の広島では、私と同じくらいの年齢の子たちも原爆によって多くの命が失われたことを知りました。その子たちの焦げた制服を見て、なぜ罪のない子供たちまで命が奪われなければならなかったのかという疑問と怒りを感じました。私には将来の夢があります。きっとその子たちにだって夢があったはずです。また、全国こども平和サミットで被爆者の方から当時の話を聞き、その方は友達や家族を失い、「楽しいことが何一つなくなってしまった」とおっしゃっていました。

唯一の被爆国に生まれ、そして今回「平和大使」として広島を訪れた今、平和の大切さや戦争の怖さを、まずは身近な人そして多くの人へと伝える責任があると強く感じました。

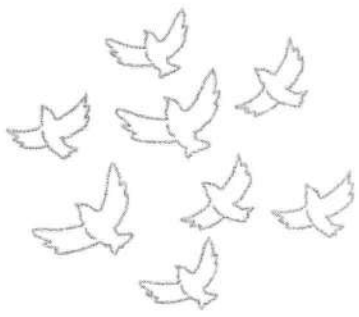
私は広島から帰ってきた後、沖縄に訪れてみたいと思いました。沖縄は原爆が落ちたところではないのですが、激しい地上戦が繰り広げられたと聞きました。広島で空からの原爆の恐ろしさを知ったからこそ、沖縄での地上戦がどんなに大変だったのかを自分の足で訪れて知りたいです。多くの奪われた命があるからこそ、私は今まで以上に命を大切にして、平和についてもっと真剣に考えていきたいです。

「うれしい！」と笑顔でいられる瞬間は決してたくさんいることを知り、私が今「楽しい！」と思えることを、戦争が終わってもつらい思いをしている人がなってしまった」とおっしゃっていました。

「平和大使として学んだこと」

初めての言葉に出来ない気持ち

長崎 小学校 6年 氏名 小笠原陽一朗



「一班、小笠原陽一朗。」

結団式で名前を呼ばれた。

この時を境に流山市平和大使としての緊張が一層高まった。

八月五日の広島派遣当日、原爆の子の像の前。

流山の皆の想いと希望が折り込まれた千羽鶴を、両手でそっと献納した。全国からの千羽鶴があり、見たことのない量ですごいと思った。

地面に大量の頭蓋骨。

それは、ぼくが平和記念資料館の写真の中で一番心に残ったものだ。白黒のいがにも昔っぽい大きな写真で、全て無機物のように見えたが、どの骨も、いつも通りの日常を歩んでいたはずである。ぼくは、その骨一人一人が語りかけてくるような気がして、だとしたら何がいいたいかを考えた。

少し胸に写真のことがつかかったままの夜ごはん。

広島と〝えば…そう、お好み焼き。いつも食べているものとはちがって少し甘口で、初めての味だったけど、ホカホカで資料館での恐怖が全てふき飛ぶくらいおいしかった。満足。

一日中暑かったから、ホテルに入ると、とってもすずしくて良い香りがした。ティーバッグで何でも飲めて、広くて至れり尽せりな環境すぎて、朝五時に部屋の友達と起きて、テレビを見ながらコーヒーを飲んだ。少し大人になった気分だった。

翌日の平和記念式典会場。

荷物をかばんから出し、荷物検査をするほどの警備だとは思わなかったので驚いた。でも、式典が始まったら意味が分かった。たくさんの要人が来ていたからだ。

八十一年前の今日、午前八時十五分、広島

「平和大使として学んだこと」

長崎　小学校　6年　氏名　小笠原　陽一朗

に原爆が投下された。
「黙祷。」
式典会場が一分間の沈黙に包まれた。ぼくは、ケガや火傷がひどくても少しの間生きつづけ、苦しんだ人々が今ここにいたら何を話しただろうと思いながら目をつぶっていた。
こども平和サミットの被爆者の話は、時々言葉がつまってしまうくらい辛い出来事を話してくれていた。ぼくはそれを聞いて辛さを想像してみたけれど、きっと全然足りないと思う。ぼくは当時の景色を知らないからだ。
初めて感じた言葉に出来ない気持ちがあった。
当事者とは同じようにできないが、ぼくも語りつづけ、残していかなければならない。
戦争を無くすために。

「平和大使として学んだこと」

２日間広島に行って知ったこと

東深井小学校　５年　菊池　朝陽



ぼくは、８月５日から６日までの２日間、平和大使として広島に行きました。

広島に行く前に、戦争について学ぼうと映画の「火垂るの墓」を見ました。戦争で大切な家族が死んでしまい、見た後はとても悲しい気持ちになりました。実際に広島でボロボロになった原爆ドームを見て、大きな建物を一瞬でこわしてしまう原爆がとてもこわいなと思いました。２日目に参加した、「全国こども平和サミット」では、１４才に広島で被災した町の様子を見た女性の話を聞きました。

「町がボロボロで、全身大やけどの人達、死体がたくさん転がった町を歩いた。こわくて下を見られなかった。」と大変な経験をした話を聞いて、今の広島は緑がたくさんあって、川が流れていて、とてもきれいな町になっていたので、とても信じられませんでした。

今、ぼくが住んでいる町が、きれいで緑がいっぱいの町なのは、平和だからです。このたくさんの木を守りたいです。みんなにも広島で起きたことを知ってもらいたいです。

広島に行って印象に残ったことは、１日目の夜に「お好み共和国ひろしま村」で食べたお好み焼きがおいしかったことです。

下に焼きそばがしいてあるお好み焼きは、初めて食べました。他にも路面電車に初めて乗りました。町の中を車と並んで走るのが楽しかったです。

行く前は、知らない子と行くのが不安だったけどたくさんのことを知る事ができて広島に行ってよかったです。

「平和大使として学んだこと」

私たちが受け継ぐこと

八木北小学校　６年　根田　藍里



八月五日、私は流山市平和大使として東京駅を出発した。まだその時は原子爆弾の脅威を理解しきれていなかった。

広島に着くと流山よりも暑くて空気が違う気がした。セミもうるさかった。原爆が落ちてすさまじい音が鳴った時、セミの鳴き声が一瞬で消えたらしい。

こども平和サミットで被爆体験証言者である河野キヨ美さんの話を聞いた。

静かな夏の朝、突然今までで聞いたことのないものすごい爆発音がひびいた。お姉さんを探しに広島中を歩いた時、昨日までであった街がきれいに消えていたこと。何とも表現できない焼けたにおいがしたこと。太陽よりも熱い強烈な三～四千度の熱線が、街を、人を、人々の生活を一瞬にして焼き尽くした。熱線をあびた人は体に大きな損傷を受け、ほとんどの人が即死か数日のうちに亡くなってしまい、八月六日から十二月三十一日まで、約十四万人の尊い命が失われた。ひどいやけどを負い、苦しむ人々も、中身が全部焦げたお弁当も、折れて曲がった鉄骨負い、体が真っ赤になった人、目玉がゼリーのように流れてしまった人。キヨ美さんはあまりの恐ろしさに、しばらく一人では寝ることができなかったそうだ。

原爆ドームを見たり、キヨ美さんの話を聞いた時、現実にすぎていて心が追い付かなかった。

私がより原爆の恐ろしさを実感したのは、こども平和サミットで原爆投下後、当時三年生だった坂本はつみさんが書いた「げんしばくだん」という詩の「げんしばくだん」がおちると、ひるがよるになって、人はおばけになる」をみんなで読んだ時だ。自分で声を出し、この詩を書いた子と同じような気持ちで読むと、その時の悲惨な情景が頭に浮かび本当に原爆は恐ろしいと感じた。大やけどを負い苦しむ人々も、中

も、あんなにボロボロになった衣服も。私達と同じような日常を送ってきた人達が大切にしてきた全てが一瞬にしてなくなってしまったんだ。詩は聞いていた時と声に出した時とでは全く違った。自分の言葉で発すると、詩の一文字一文字に重みを感じ、胸が締め付けられるようだった。でも原爆で大切なものを失った人達は、もっと私の何百倍も何千倍も苦しみと痛みを味わったと思う。私は自分の言葉で広島で犠牲になった人達の思いを繋いでいきたいと思った。

私は広島に行ってとても貴重な体験をさせてもらった。そして戦争は二度と繰り返してはいけないということを学んだ。これからも、戦争の悲惨さと原爆や戦争のことを学び、戦争をなくすことに繋がると信じている。

重ねがきっと世界から戦争をなくすその小さな積み過ごしていきたいと思った。そして身近な家族や友人と平和の心で仲良く平和の大切さを周りの人に伝えていきたい。

「平和大使として学んだこと」

当たり前の日常の大切さ

おおたかの森小学校　５年　松本　侑樹



僕の毎日は、『幸せな毎日』それが当たり前だと思っていました。家族がいて、友達がいて、好きな所に行けて、おなかいっぱい食べられる、そんな『幸せな毎日』。でも、実際に平和大使として広島に行くと、その考えが一瞬で砕けました。八月六日の平和サミットでは、被爆者のおばあさんがお話をしてくれました。

途中悲惨な写真が出てきました。人が幽霊のようになっていました。衣服は破れ、皮膚は垂れ下がり、髪はちぢれ、手を前に出して、ダラーンとなっている写真でした。おばあさんによると、「水をくれー」といいながら、歩いてきたそうです。また、電車はまっ黒に焦げ、腕と胴体が切れて吊革に腕だけが残っていたそうです。その話を聞いて、背中がぞっとして、つらい気持ちになりました。

平和大使になる前の僕は、原爆のことについて考えたことはありませんでしたが、今回の平和大使で原爆の恐ろしさを知りました。

僕は平和大使として原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さを知り、今自分が幸せなのは戦争がない平和があるからだということを学びました。

僕は平和大使として、戦争をしないことが大事だと思いました。そのためにできることは、まずは小さい喧嘩を減らしていきたいです。また、原爆の恐ろしさや、戦争をしないことの大切さを周りの人に伝えていきたいです。

あの原爆で家族を亡くして『幸せな毎日』を送れるのは有難いと思いました。

今の自分が家族がいる『幸せな毎日』を送れるのは有難いと思いました。

一つの爆弾で多くの人が亡くなったことを考えると許せないです。

家族がいて、友達がいて、好きな所に行けて、おなかいっぱい食べられる、そんな『幸せな毎日』。でも、実際に、被爆を体験した人のことを思うと胸が痛くなりました。

一瞬で砕けました。八月六日の平和サミットでは、被爆者のおばあさんがお話をしてくれました。

途中悲惨な写真が出てきました。人が幽霊のようになっていました。衣服は破れ、皮膚は垂れ下がり、髪はちぢれ、手を前に出して、ダラーンとなっている写真でした。おばあさんによると、「水をくれー」といいながら、歩いてきたそうです。また、電車はまっ黒に焦げ、腕と胴体が切れて吊革に腕だけが残っていたそうです。その話を聞いて、背中がぞっとして、つらい気持ちになりました。

平和大使になる前の僕は、原爆のことについて考えたことはありませんでしたが、今回の平和大使で原爆の恐ろしさを知りました。

僕は平和大使として、戦争をしないことが大事だと思いました。そのためにできることは、まずは小さい喧嘩を減らしていきたいです。また、原爆の恐ろしさや、戦争をしないことの大切さを周りの人に伝えていきたいです。

「平和大使として学んだこと」

平和な世界を作るために、今、ぼくにできること

長崎小学校　６年　赤羽　琉珂

ぼくは、この夏「平和大使」として広島へ行ったことで、今までの自分の生活が昔の人達にとっては当たり前ではなかったことにショックを受けた。これまで原爆や戦争のことは学校の授業やテレビで聞いたことがあったが、今回『平和記念資料館』で当時の写真や展示品を初めて自分の目で見て「これが昔の日本で起きたことなのか…」と、すごく怖くてずっと見続けることができなかったし、今自分が戦争の無い日本で生きていることに安心する思いもあった。今までは原爆や戦争のことを深く考えたことがなかったが、ぼくの心の中で初めて「平和のありがたさ」を感じた瞬間だった。

『平和記念資料館』で見たことを振り返ると、今の日本が戦争の無い国でいられるのは原爆や戦争があった時代に生きていた方たちが大切な命をかけて日本を守り、たくさんの悲しみや後遺症などをかかえながらも、一生けん命に平和な日本を作ってきてくれたからこそ、今の平和な日本があるのだと思った。

令和を生きるぼく達が「戦争のない日本」で平和に暮らすことができているのだと思った。

ただ、日本以外に目を向けるとどうだろうか。『平和記念資料館』で見た焼け野原の写真や傷ついた子どもの写真を見て、「この前見たニュースの映像と似ているな…」と思う場面が多くあった。このことを両親に話すと、世界ではウクライナ戦争を初め、現在も戦争をしている国や核兵器を持つ国がたくさんあり、毎日多くの命が失われていることを教えてくれた。日本に住むぼくには信じられない話だが、それが現実なのだ。

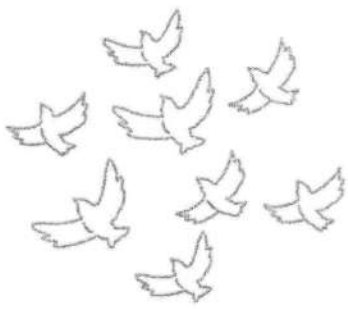
「戦争をなくすためにはどうすればいいか？」ぼくにとっては少し考えるのが難しいが、それでもぼくは「どんな時でも自分を大切にすること。どんな時でも相手を大切に思うこと。」この気持ちがあれば、平和な世界に近づくことができると思っている。

世界中の人々に平和な日々が訪れますように…。

「平和大使として学んだこと」

平和のために自分たちができること

南流山第二小学校　6年　氏名 川原 新心



平和とは、ただ争いが起きない状態ではなく、住みよい豊かな社会であることを知りました。なので、これから平和な社会が保たれるように、自分たちができることを考えてみました。まず最初に、みんなで平和の輪を広げるという事が大切だと思いました。その為には、みなさんが口にしていた「相手の意見を受けとめる」ということが大事だと感じました。日常の会話の中で、意見がぶつかることもあります。その時は、相手の意見をひていするのではなく、どうしてそう思ったんだろう？と一度考えて相手の意見を受けとめ、みとめてあげることで考えが広がっていきます。たくさんの人たちが相手の考えを受けとめていくことで、一度考えてみることができ、理解し合えるかもしれません。なので「相手の意見を受けとめる」ことは、平和の輪を広げることへの第一歩につながることができると考えました。

次に平和について解決策を考えている人たちの、スペースを作っていくことが大切だと考えました。解決策を考えている人たちは、きっとくりかえし考えたいと思っているはずです。だから考えている人たちのスペースを作ってあげることでその人たちが考を生み出す可能性が広がると考えました。

最後に希望をとどけることが大切だと思いました。平和にすることをあきらめるのではなく、まだあきらめてはいけないという希望をとどけることで、平和はつくっていけるものだと思いました。

私たちの一つ一つの小さな行動が集まって大きな平和につながっていけるようにふだんの日常から平和のことを意識していきたいと思いました。

「平和大使として学んだこと」

未来へつなぐ平和のバトン

小山小学校　５年　城澤　奈由華

私は二年生のときに、「禎子の千羽鶴」という本を読みました。今回私が平和大使に応募したのは、実際に原爆ドームや原爆の子の像を見たり、被爆した方々のお話を直接聞いたりして、禎子の命を奪った原爆がどんなものだったのかを知りたいと思ったからです。

一日目に訪れた資料館は暗く、展示物は生々しく恐ろしかったです。一番心に残っている展示は、がい骨の山の写真です。戦争を終わらせるためにもっと話し合いをしていたら、広島や長崎に原爆を落とされることも、多くの人の命を奪われることもなかったのではないでしょうか。来ていた人はみんな原爆について学びに来たのかなと思いました。平和を願う人がこんなにたくさんいたら、核兵器の廃絶も夢ではないかもしれません。

二日目の平和記念式典では、子どもから大人まで色々な国の人や立場の人が集まり、黙祷をしました。遠くからデモの声が聞こえました。平和を祈る式典に反対する人がいることに、驚きました。その後の子ども平和サミットでの河野キヨ美さんのお話では、被爆した方の腕だけが路面電車のつり革に残されていたところが本当に怖かったです。もし私がその場にいたら、恐ろしくて逃げ出してしまったかもしれません。７年待っても帰って来なかったお姉さんのことや、「原爆が大嫌いだ」という思いを書いた詩の朗読もありました。

平和大使を終え、原爆や戦争は私が住んでいる日本で実際に起きたことなのだと実感しました。広島で見たことや聞いたことを、自分の中だけにとどめず、多くの人に伝えていこうと思います。平和は自分たちでつくり上げるものです。多くの尊い命を奪った原爆や戦争を過去のこととして終わらせるのではなく、世界中の人々が平和について考えなければならないと思います。私もその一人として考え続け、できることをしていきます。

「平和大使として学んだこと」

平和への想い

向小金小学校　５年　杉本 陽奈子

私は八月五日、六日にかけて「平和大使」として、広島に行きました。八十一年前、この日本で、広島に原爆が落ちたと聞いて、興味を持ったからです。

一日目は、原爆の子の像や、平和記念資料館へ行きました。原爆の子の像の周りにはたくさんの千羽鶴がそえられていて、原爆に多くの人の想いがこめられていることを、そのときに実感しました。そえきれずに、下にも置かれるほどでした。

平和記念資料館では、原爆で黒くこげたお弁当箱や、服や帽子がちぎれている展示物を見ました。その時の絶望感は、忘れられません。被害の大きさやせいさんさを、初めて体感することとなりました。

二日目は、式典や平和サミットに参加しました。式典では、日本の総理や、広島市長、外国人なども来ていて、その式典が、日本にとってどれほど重要なことなのか理解しました。

式典で広島を代表してこどもたちが誓いの言葉を立てていたので、次の若い世代も、原爆に向き合うことが大切だと思いました。そして、外国人がたくさん来ていたので、日本だけで向き合うのではなく、世界中に広めることも大切だと思いました。

私が低学年の時に、ウクライナとロシアの戦争のニュースを見ていて、その時は、ただ「かわいそうだなぁ」と思っていただけだったけれど、日本でそれよりひどいことが起きていたことを平和記念資料館で見聞きし、戦争は遠いこと、日本に関係ないことではないのだと強く感じました。

平和サミットでは、原爆を体験した人の話を聞き、原爆の辛さ、悲しさを思い知りました。他にも、たくさんの中学生の発表を聞き、どうすれば平和な世界にできるのかよく考えました。

そこで私は、身近で出来ることを探しました。

一つ目は、誰にでも優しくすること。二つ

目は、みにくいあらそいごとをしないこと。

三つ目は、自ら気付いて正しい行動をすることです。この三つを守れば、身近に平和が生まれると思います。

そして、一番大切なのが世界の平和です。

世界の平和のために、私たちができることは、日本の八十一年前の出来事から目をそらさず、理解し、二度と起こさないようにすることが大切です。そのためには、今回私が「平和大使」として、このような企画に参加し、勉強させてもらったように、現実に起こった歴史から学ぶことを続け、若い世代が勉強して、注意を広めていくことが大切だと思いました。

広島に行ったこの二日間を機に、長崎の原爆も調べてみようと思います。そして、最も身近な自分が住んでいる流山地域の戦争体験、戦時中の出来事なども今後学び、周りの人たちにも伝えていきたいと思いました。

私は、世界を平和にしていきたいです。

「平和大使として学んだこと」

未来の平和のために

おおぐろの森小学校　６年　豊川　楓



私は平和大使として広島に訪れ、平和への思いが変わりました。今までは、広島に原爆が落とされたことは遠い昔のことだと思っていました。しかし、今でも世界中のどこかで争いが起きていることを知り、平和は当たり前のことではないと分かりました。

平和記念資料館に行ってボロボロになった制服や真っ暗に焼き焦げたお弁当箱を見て、一瞬で奪われた当たり前の日常が原爆により、とても恐ろしい気持ちになりました。また、被爆体験伝承者の方の講話を聴いて、当時の広島の悲惨な様子をリアルに感じ取ることができました。特に沢山の中学生の男の子の遺体が花壇に積み上げられていた、という話がとても心に残りました。話を聞くだけで恐ろしいのに、実際に体験した人はどんなに怖い思いをしたのか、恐ろしく思いました。さらに、平和祈念式典に参列し、平和の尊さにまた深く考えることができました。

広島を訪れて、今ある日常にたくさん感謝したいと思いました。そして、今も世界中で戦争が起きている現状を思い、とても悲しい思いになりました。これから、少しだけでも知ってもらい、平和の尊さに再び気づいてもらい、平和を守る大人になりたいです。

平和は決して当たり前のものではなく、たくさんの人の努力の積み重ねによって創られています。平和を守っていかなければならないのだと思います。そのために、どんなに恐ろしい過去があったとしても、目をそらさず過去の失敗を今に活かすことを努力し続けます。

これから先、友達や家族に平和の尊さを伝え、差別やケンカをなくしていけるように声をかけていきたいと思います。そして、将来平和を守る大人になりたいです。

「平和大使として学んだこと」

ぼくが広島で学んだこと

おおたかの森小学校　５年　平井　瑠偉



ぼくのひいおじいちゃん達は、戦争経験者です。ぼくは、平和大使になるまでこの事を知りませんでした。

一人目のひいおじいちゃんは、呉海軍の教育隊に入隊していました。たくさんの資格を持っていたので、ライフライン の管理などをしていたそうです。機密事項が多く、家族でもくわしい仕事内容は教えてもらえなかったそうです。

もう一人のひいおじいちゃんは、兵隊として中国へ行き、つらい経験や悲しい思いをたくさんしたそうです。亡くなる直前までつらかったと戦争の事を話していたそうです。会ったことのないひいおじいちゃん達だけど、ぼくの身近に実際に戦争を経験した人がいることは信じられませんでした。

テレビのニュースで見る戦争は、どこか別の世界で起きていることで、自分とは関係のない出来事のように感じていました。

今回ぼくは、流山市平和大使として広島に行ったことで、ぼくの生まれた広島で起きたこと を くわしく知りました。そして、八十一年前に一瞬で多くの人の命が失われ、今も苦しんでいる人がいることが現実だと実感しました。ぼくにとって八十一年は想像できないくらい長い時間です。たくさんの人が亡くなり悲しんだ人がいたのに、今でも戦争はなくなっていません。

これから、自分に出来ることは何なのか、たくさん考えたいと思います。自分とちがう考えを持つ人にも優しくていねいに接したいと思います。これまで知らなかった広島の歴史を知ることができて、広島への違う見方が出来るようになりました。今の自分が行くことができて良かったと思います。ありがとうございました。

「平和大使として学んだこと」

ヒロシマ

東深井小学校　６年　鎌田　悠生



「平和とは、誰かから与えられたものではなく世界中の人々で創り上げるものです。」子供である私たちもその一員として平和へ一歩を踏み出します。」かけがいのない大切な物を確かな希望を届けるために。」

これは、広島平和祈念式典子供代表の柿谷さんと河野さんの「平和への誓い」から抜き取った一節である。

私は広島に行くまで戦争はただ怖いだけの物だと思っていた。けれど、平和大使として事前学習や広島派遣を通して、戦争を怖いというたった一言で片付けてはいけない物だと強く思った。

「痛いよ、苦しいよ」

「助けてお母さん」

「死にたくない」

「助けてあげられなくてごめん」

そんな叫びに胸がぎゅっとなる。

広島に行った時、本当に原爆が落ちた町なのかと疑うほど今の広島は明るい町だった。

私が一番印象に残っているのは平和記念資料館、今にも崩れてしまいそうな原爆ドーム、河野キヨ美さんの被爆体験談を聞いて少しずつそれが広島で起きた事実だと感じ始めた。

かけがいのない大切な物を確かな希望を届けるために。」

これは、広島平和祈念式典子供代表の柿谷さんと河野さんの「平和への誓い」から抜き取った一節である。

私は広島に行くまで戦争はただ怖いだけの物だと思っていた。けれど、平和大使として事前学習や広島派遣を通して、戦争を怖いというたった一言で片付けてはいけない物だと強く思った。

「痛いよ、苦しいよ」

「助けてお母さん」

「死にたくない」

「助けてあげられなくてごめん」

そんな叫びに胸がぎゅっとなる。

広島に行った時、本当に原爆が落ちた町なのかと疑うほど今の広島は明るい町だった。

料館に展示されている「一台の三輪車」だ。

その男の子が家の前で三輪車に乗って遊んでいた時に原爆の被害に遭った。その男の子はその日の夜亡くなった。お父さんは、３歳の子が一人ぼっちでお墓に入るのは寂しいと思い亡くなった男の子と一緒に三輪車を庭に埋めた。それから４０年たってお父さんは、男の子の骨をお墓に入れて三輪車を平和祈念資料館に預けることにした。私は資料館に行く前からこの三輪車を見たいと思っていたが、実際に見ると三輪車の悲惨さは思っていた以上で、原爆の威力が伝わってきた。私は、男の子の三輪車やたくさんの人々の遺品を見て原爆の被害で亡くなった人たちの分まで沢山の事を学び、経験し、この命を大切に

生きていきたい。

私は平和大使として広島に行き沢山の事を学んだ。その中でも一番大事だと思うことは、今ある平和は、当たり前の物ではないということ。私はこれから生きていく上でこの言葉を胸に刻み原爆で亡くなってしまった人たちの分まで一生懸命生きて行こうと思う。

「平和大使として学んだこと」

平和のためにやるべきこと

市野谷小学校　６年　工藤　陽



平和大使を終えた今、僕は思った。原爆と平和を当たり前のものとしてとらえていた。だが、そんな考え方は捨てようと今は思う。

僕は、戦争については本で読んだことがあるだけで、どこか遠い存在として見ていて、「惨状」そのものだと。

資料館に入ってすぐ見たのは、原爆を受けた後の広島の街の写真だった。原爆を受けた街は、地震や津波で壊れてしまった街とは比べ物にならない強い悲しみがあった。僕は、資料館で原爆で亡くなった人々、荒れ野原となってしまった広島の街、後遺症で苦しむ人々の資料を見た。その中でも僕の印象に残ったのは、たくさんの人の「骨」の写真だ。僕は悲しみと同時に、こんなことが実際にあり、それらをやったのが同じ人間であることに強い恐怖を感じた。

平和記念公園での式典を終えた僕たちは、子供平和サミットに出席した。そこで聞いたのは実際戦争を経験し、お姉さんたちが被爆

島や長崎の街や、いつも通りお弁当をもって学校に行く高校生、一生懸命職場で働く人々、三輪車で遊ぶ男の子の「いつも通り」がうばわれることなんてなかったのに、と僕は強く思った。

日本には、世界で唯一の原爆の被爆国として、未来にその記録を伝えていく義務があると僕は思う。実際に世界では今も戦争が起こっていて、核兵器保有国もいる。世界中の平和のためには、まず僕たち一人一人が相手の意見をよく聞いたり、すぐに争ったりしないで話合いで解決したりする、平和への意識が必要だ。これは子供だから言える甘い考えだが、これが僕たち子どもにできる一つのこと

爆が投下された一日後、広島にお姉さんたちを探しに出かけた。そこにはたくさんの人々の死体が転がっていたそうだ。河野さんは原爆によってお姉さんたちを亡くした。戦争がなかったら原爆もなく、原爆がなかったら広

した河野キヨ美さんの話だ。河野さんは、原

だと僕は思う。

一人の力で世界を平和にすることは、ほぼ不可能だ。それでも平和を願う人たちは日本だけでなく、海外にもたくさんいる。きっとそんな人たちが手を取り合えば、平和は不可能なことではなくなると、僕は今回の平和大使の活動を通して学んだ。

「平和大使として学んだこと」

原子爆弾の恐ろしさ

南流山小学校　６年　小出 峻輔



僕が原爆の被害を知ったときに初めて思ったことは、被害の範囲がとても広かったということです。爆発だけではなく放射線による健康被害などでたくさんの人が亡くなったのは広島の人たちにとって忘れられないことだと知りました。

広島に訪問してみて、印象に残ったことが二つあります。一つ目は、歩いたりしたら死体が足に当たったり電車のつり革に人の手がぶら下がっているなどの体験談です。たった数秒でこんなことになるなんて原子爆弾は恐ろしいと思いました。

二つ目は、資料館で見た光景です。お弁当箱が焼け焦げていたり建物が壊れていたりなどの現実を目の当たりにして、原爆はとてもたくさんの人たちの命をうばう凶悪な兵器ということを思い知らされました。

平和な世の中にするために僕は、自分が変わっていくことが大切だと思いました。まずは周りの人にこの経験を伝えたり身近なけんかなどをとめたりすることです。そうして少しずつ周りが穏やかになれば近くの人たちも平和大使の活動を通して、核兵器をつくる人、使おうとする人が人や持ち込もうとする人がいなくなってくれればいいと感じました。被爆者は高齢化により年々減少しています。だからこそ悲しい現実を知った平和大使の僕たちが原爆と戦争の怖さを知らない人に被爆者の代弁者となって、争いは醜く、してはいけないということを広めていきたいです。

これ以上被爆者と核兵器を増やさなければ核兵器で悲しむ人がいない世界が実現するのでいなくなったほうがいいと考えました。そんな世界を実現するために自分から積極的に自分でできることをやっていきたいです。

「平和大使として学んだこと」

ぼくたちにできること

小山小学校　５年　鈴木　創二朗

僕が平和大使になった理由は、日本の歴史が描かれている学習漫画で広島に原爆が落とされて苦しんでいる人を見て平和とは何なのかと疑問に思ったからです。広島では原爆が落とされたこと、で建物が崩れ家の下敷きになってしまったり、爆風でがれきが飛んで人に当たったりして、たくさんの人が苦しんでいる写真や動画を見ました。また放射線の影響で苦しんでいる人もたくさんいたそうです。

ぼくは、原爆を落とした国は、人が苦しむだけなのにエノラ・ゲイのような飛行機や核兵器を作ってまで戦争を続けようとしたのかと疑問に思いました。そこで原爆が落とされる前のことについても考えました。日本とアメリカは何年も戦争をしていて、日本人もアメリカ人もたくさんなくなっていました。アメリカには、原爆を使って、日本を降参させ戦争を早く終わらせれば、これ以上たくさんの死人が出なくて済むという考えもあったそうです。それを知って、アメリカがなぜ原爆を落としたのかは、少しだけわかりました。でも、戦争を早く終わらせようとするためなら原爆を使ってもよかったのかと聞かれると、僕にはまだ分かりません。原爆をつかわずに戦争を終わらせる方法はなかったのかと思いました。

広島に行く前の僕は、平和とは戦争がない広島に行く前は平和大使になったので楽しみだと感じました。そして、原爆の被害にあった人たちが、どんな思いだったのか自分で考えることが大事だと思いました。

ぼくは、原爆を落とした国は、人が苦しむだけなのにエノラ・ゲイのような飛行機や核兵器を作ってまで戦争を続けようとしたのかと疑問に思いました。そこで原爆が落とされる前のことについても考えました。日本とアメリカは何年も戦争をしていて、日本人もアメリカ人もたくさんなくなっていました。アメリカには、原爆を使って、日本を降参させ戦争を早く終わらせれば、これ以上たくさんの死人が出なくて済むという考えもあったそうです。それを知って、アメリカがなぜ原爆を落としたのかは、少しだけわかりました。でも、戦争を早く終わらせようとするためなら原爆を使ってもよかったのかと聞かれると、僕にはまだ分かりません。原爆をつかわずに戦争を終わらせる方法はなかったのかと思いました。

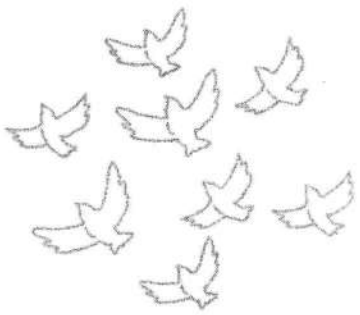
広島に行く前の僕は、平和とは戦争がない

ことだと思っていましたが今はそれだけではないとおもっています。学校に通ったり、友達と遊んだり、ごはんを食べたり、家で安心して寝たり、家族と話をしたりできることも平和だと思います。そういった毎日は当たり前のようだけど戦争が起きたら当たり前ではなくなってしまいます。僕たちにできることは広島で起きたことを次の世代に伝えていくことだと思います。そしてただ「戦争はだめだ」と伝えるだけではなく、平和とは何なのか、戦争が起きないためにはどうしていけばよいのかを自分でも考えてそれをみんなにも伝えてもらいたいです。

「平和大使として学んだこと」

戦争なんて幸せをうばうだけ

長崎 小学校 5 年 氏名 高橋美輝



みなさんは、原ばくというおそろしいばくだんで、電車のつりかわに人の手だけが残るすがたが想像できますか。

私は、八月六日に広島平和サミットの式典に、流山市の平和大使として参加しました。サミットでは、世界でゆいいつのひばく国として、世界中の人達と戦争について考える会です。

そこで、ひばく体験者の河野さんの話を聞いて、原ばくのおそろしさを感じてきました。

原ばくは、ふつうの生活をこしゅんにして、うばってしまいます。何もかもです。働きに出る人も、家族も、ふつう像も、高い建て物も、全てです。

私は、ふだんの日常が大切です。朝起きて、家族がいて、食事をして、みんなで笑って。そんな日常が大切です。この当たり前な生活が大切に思えるのは、河野さんたちの悲さんな話のおかげです。

戦争や原ばくは悲さんです。私達のふつう通の生活をうばいます。だれにも大切な所をうばうことは出来ないはずです。

私は、この悲さんな体験を心にきざみ周りに伝え続けます。そうする事で、みなさんのふだんの生活が、いかに大切で、いかに愛おしいかが再確にん出来るからです。最後に、戦争も原ばくもない平和な世界になったらうれしいです。

「平和大使として学んだこと」

平和を望む

鰭ヶ崎小学校　５年　山田　あかり

　広島平和記念資料館で、大きく口を開けて上を向き、降ってくる黒い雨を飲んでいる人の絵がありました。事前学習で黒い雨が降ってきたと思ったら私も口を開けて懸命に飲んだかもしれないとも感じました。街は復興しても、81年経った今も苦しんでいる人がいるので、大きく口を開けて上を向き、降ってくる黒い雨を飲んでいる人の絵がありました。事前学習で黒い雨が降ってきたと思ったら私も口を開けて懸命に飲んだかもしれないとも感じました。街は復興しても、81年経った今も苦しんでいる人がいるので、

　しかし、資料館に展示されていた皮膚が垂れ下がった腕を前に伸ばして歩く人の絵や、まなそうなのに、と考えていました。

　いましたが、黒い雨なんて気持ちが悪くて飲むものだと聞いて身体にひどく悪い影響があるものだと聞いてたこと、またその雨が放射性物質を多く含み、被爆体験講話で子どもの死体が山積みになっていた事、死体につまずいて転ばないように下を見る必要があった事、その時、死んでいる人の内臓を見たくないのに目にしなくてはならなかった事を聞いて、恐ろしい光景が目の前に広がっていたら、全てが信じられなくて、雨が黒い事なんて、大した事でないと感じたかもしれないと思いました。ひどい暑さの中、水が降ってきたと思ったら、

　皮膚が垂れ下がっても歩き続けている人がいるので被害は続いています。

　人たちは、家に帰りたかったのだろうと思います。家族に会いたい、その一心で、痛くても辛くても歩いたのだろうと思います。悪い事をしていない人たちの命を一瞬で奪った原爆を、武器を、戦争を許してはならないし、

　「競争よりも協力、対立よりも対話」という言葉がありました。相手に攻撃させないための予防の武器なんて、平和と真逆だと私も思います。お互い武器を作り合っていたら、増えていくだけで終わりがありません。生きたいと思う事、幸せに暮らしたいと思う事は全人類の望みだと思うので、武器を持つことの恐ろしさを、核爆弾が一瞬でむごい世界を作り出す事を一人でも多くの人に知ってもらい、戦争を始めないようにすることが大切だと考えます。お互い向かい合ってケンカするのではなく、横に並んで、絶対戦争はしない

と決めて、平和のために他に何ができるのか、沢山話し合って仲良くなって欲しいです。武器を持っているから、使うぞと脅し合う、思い通りにならなかったら攻撃するのだから、核を手放してほしいです。武器がないと本当に平和が守れない世の中なのか、もっといい方法はないか、考え続ける役目が私たちにはあると思います。

「平和大使として学んだこと」

かけがえのない「あたりまえ」

小山小学校　６年　貝瀬　華



朝起きたら学校に行って、友達と遊んで、帰れば暖かい家と優しい家族が待っている。それが今までの私にとっての「あたりまえ」でした。ですが、平和大使として広島へ行き、その考えは大きく変わりました。

一日目に行った広島の平和記念資料館には、被爆者の方々が描いた絵や、当時のものが展示されていました。その中には黒く焦げて炭のようになった茂さんのお弁当や、当時三歳だった伸一ちゃんの三輪車なども展示されていました。それらの展示を見て、原爆さえなければ伸一ちゃんも、滋さんもいつも通りの暮らしができていたと思うと、胸がぎゅっと締め付けられるような、とても悲しい気持ちになりました。原爆がなければ、こんな風に広島の人々が「あたりまえ」を壊されて、生活を壊されて、人生を壊されて、街を壊されて、こんな悲しくて辛いことは無かったはずです。広島、長崎のような経験をする人がいない世界にするために、私たちにはどんなこ

とができるのでしょうか。

私たちはまだ子供です。きっと私たちが、「戦争をやめましょう」、そう言ったとしても、世界を変えることは、戦争を止めることは難しいと思います。ですから今は、家族やクラス内など、手の届く範囲内で自分にできることを考えて行動することが大切だと私は思います。

例えば、困っている人がいたら手を差し伸べる、声をかけるなど、他の人へ優しさを持って接する。そして、私が特に大事だと思うのは、意見の違いがあっても、お互いを責めるのではなく、お互いの意見を受け入れ、それぞれの良さを見つける、そんな視点の持ち方です。私は広島で学んだこれらの考えを大切にし、平和な毎日や「あたりまえ」への感謝を常に持ちながら、これからも自分にできることをしていこうと思います。

「平和大使として学んだこと」

僕の見た広島

おおたかの森小学校　６年　小林　輝希

「平和大使って何だろう？」母にすすめられて平和大使に応募しましたが、何をするのかわかっていませんでした。僕のひいおじいさんたちの時代の戦争で何が起きたのか、原爆はどのようなものなのかもほとんど知りませんでした。広島派遣の結団式で市長と教育長の話を聞いて、流山市の代表として広島でしっかり平和について学ぼうという気持ちが強くなりました。

広島の街は、大きな建物や緑あふれる公園がたくさんあり、ここが81年前に原爆で焼け野原になっていたとは思えないくらいにぎやかでした。広島の人々や外国からの支援など、みんなで力を合わせてここまで復興できたことがすごいと思いました。

平和記念公園は、広くて静かできれいにされていて、そこだけ時間がゆっくり流れているように感じました。平和記念公園について調べてみたら、原爆投下からわずか４年後に平和の象徴の地として公園を整備することが決まり、その６年後に完成したそうです。平和記念公園や資料館を見学して、悲惨な原爆被害範囲地図を参考にして、父と一緒に僕の住んでいる街の流山おおたかの森駅に原爆が落ちた場合の被害範囲地図を作ることができました。

広島の原爆被害範囲地図を参考にして、父と一緒に僕の住んでいる街の流山おおたかの森駅に原爆が落ちた場合の被害範囲地図を作りました。僕の家や学校を含め、流山運動公園や初石駅、豊四季駅の先までの範囲の家が焼けてしまうことがわかり、原爆の破壊力の恐ろしさを知りました。

戦争は良くないことだと言われているのに大昔からなくならず、今でも世界では戦争をしている国があります。敵同士でも家に帰れば愛する家族がいるのです。今回広島で学んだことを忘れずに、思いやりと愛情の気持ちをもって誰もが幸せに暮らせる世界を作っていきたいと思います。

「平和大使として学んだこと」

私の平和大使としての使命

長崎小学校　５年　佐藤　悠乃



この世界に、戦争は必要だと思いますか。

この世界に、核兵器は必要だと思いますか。

「広島平和記念資料館」では、資料や写真を見て、ショックを受けました。

思わず目をそらしたくなるような原爆の悲惨な状況が壁全体に描かれていて、やけどを負った人、服や肌などが溶けている人、たくさんの人たちが死んでいく、そんな絵を見ました。

「広島平和記念資料館」では、資料や写真を見て、ショックを受けました。

思わず目をそらしたくなるような原爆の悲惨な状況が壁全体に描かれていて、やけどを負った人、服や肌などが溶けている人、たくさんの人たちが死んでいく、そんな絵を見ました。

なんでこんなことができるのか、理解ができませんでした。

なんでこんなことができるのか、理解ができません。戦争や核兵器はどんなことがあっても、必要ではないと改めて思いました。

「こども平和サミット」では、二十二の都道府県から集まった子供たちや被爆体験者の方などが、平和や戦争について、熱心にお話をしてくださいました。それは、私の心を強く打つものでした。その中でも、サミットで心に残ったことは、河野キヨ美さんの被爆体験の話です。

「こども平和サミット」では、二十二の都道府県から集まった子供たちや被爆体験者の方などが、平和や戦争について、熱心にお話をしてくださいました。それは、私の心を強く打つものでした。その中でも、サミットで心に残ったことは、河野キヨ美さんの被爆体験の話です。

当時、河野さんは原爆が落とされた広島に、

当時、河野さんは原爆が落とされた広島に、二人の姉を探しに行ったそうです。

「その時見たのが、地面いっぱいに広がるけが人や死体で、同じ人間ではないかのようだった。地面も約三千度から四千度くらいだったらしい。」

と、仰っていました。

私には妹が二人いますが、私が河野さんの立場だったら、探しに行っても途中で泣いて引き返してしまいそう、と思いました。

「原爆が落ちて長い間、草、木、花、何一つ生えなかった広島に、日本のたくさんの人の援助が援助してくれたおかげで自然いっぱいの広島になっていったことがうれしい。」

私は、『日本のたくさんの人が援助』をしたことも仰っていました。

私は、『日本のたくさんの人が援助』をしたという言葉に、日本国内で広島県のために援助をしているのならば、自分の国だけでなく、世界中の人々が協力し、助け合って、お互いを認め合えたらいいのにと思いました。

広島に行く前、私は平和大使としての使命

をきちんと理解できていませんでした。です
が、今回の広島派遣でこれから自分がどうす
るべきかイメージすることができました。
　平和サミットで話していた中高生の方々や
河野さんのように、身近な人に、戦争のつら
さや悲しさをしっかり伝えること。そして、
友達と意見が合わないことがあっても、まず
は相手の気持ちを理解しようとすること。こ
の二つが、今、私にできる平和への第一歩だ
と思います。

「平和大使として学んだこと」

平和への道

江戸川台小学校　５年　滝沢　旺佑



八十一年前八月六日、広島に原爆が投下され辺り一面焼け野原になりました。今まで他人事と思い何も原爆について知らなかったけれど、資料館や原爆ドームを見て自分事と考え始めました。原爆よりも恐ろしいミサイルだというこは無いと思えるほど強いミサイルだと思いました。広島の人々は、もっとも残酷でもっとも悲しい死に方をしたということが分かりました。広島の悲惨な状況を見て人々の悲しみなどの思いが伝わってきました。

広島の被爆者の人々には、大人にもなれずに死んでしまった人も大勢います。その様な人びとのことを思うと、悲しくなります。そんな広島について僕は、日本の中で最も残酷な県だと思いました。

平和大使としてこの旅に参加して原爆について詳しくなり、より戦争の残酷さを学べました。平和大使を経験し、自分の中で平和のすごさを学べました。これから平和でいるために思いやりを持ち相手を尊重しあうことが今自分にできることだと思いました。この経験を役立てるために、これからは、広島について知らない人などに広島の原爆について教えていこうと思います。これから平和な時代を作っていくためには、戦争や喧嘩をなくして、相手を思いやる気持ちが大切だと僕は思いました。

「平和大使として学んだこと」

僕が見た広島

八木北小学校　５年　野口　遊宇

私は、広島に行き、核兵器がもたらす悲惨さなどを広島平和記念資料館で学びました。

一番印象に残ったことは、原爆の被害によって皮膚が焼かれてる悲惨さです。熱線によって水を飲むことができず、苦しんで死んでしまった人が沢山いました。良かれと思って水を飲ませた人は、迷信なのに、私のせいで亡くなってしまった、と感じたと思います。そして、せっかく運よく熱線から逃れたとしても、放射線による被害で、４か月後くらいに亡くなってしまう人もいました。

それらを総合して言えることは、原爆は、何一つ良いことを生み出さずに、人々に罪悪感などを植え付けるということです。そのために、原爆はこの世に無いほうがいいと言えます。

原爆は、無くなるどころか増えていますが、日本の訴えがあっても、世界からは、

ですが、

す。

その理由は、どこかの国が核兵器を開発すると、それに対抗するために違う国も核兵器を増やして、ほかの国も対抗するために増やすという悪循環が始まるためだと思います。

広島では他に、原爆サミットにも行きました。そこでは、被爆者である人のお話を聞けた。

原爆は、大切な人の命や、自分の命を奪うかもしれません。他人事だと思ってはダメです。自分の事のように接して、協力して核爆弾を無くすようにしようと動かないと、核爆弾は無くなりません。

私は、クラスメイトや、家族にもこの話をしたいと思っています。この文章を読んだ皆さんも、核爆弾の悲惨さなどを、他の人に伝えてください。

「平和大使として学んだこと」

平和大使を終えて

向小金小学校　６年　藤巻　伸之助



ぼくは、流山市の代表の一人として、広島県広島市に行きました。

広島平和記念公園で、千羽鶴を献納しました。千羽鶴を献納したとき、ここにいる全ての人が、これからの平和を亡くなった人々に誓っているように感じました。

平和記念資料館には多くの写真がありましたが、どの写真にも笑顔はなく、とても悲惨な写真ばかりでした。写真を見て、核兵器の恐ろしさを改めて知りました。

平和記念式典では、広島県知事、広島市長などの話を聞き、核兵器と人は共存できないなどの話を聞きました。

八十一年前の広島の笑顔が消えた、などの話を聞きました。

想像を超えていました。

なるのか、周りの変化を知りました。それは

平和サミットでは、核兵器を浴びるとどうえさせられました。原爆の危険を知り、核兵器は絶対にあってはならないものだと感じました。

ぼくは広島に行って、平和について深く考

普通なら起きないはずのことでした。

これから先の未来で、同じことが繰り返されないよう、亡くなった人々に平和を誓いま

「平和大使として学んだこと」

平和大使の活動を通して感じたこと

東小学校　６年　我妻　奏輔

　八十一年前の八月六日、八時十五分。みなさんは何があったか知っていますか。その日は、広島県に原子爆弾が投下された日です。

　ぼくはこれまで「戦争」「原子爆弾」という言葉を聞いたことはあったけど、遠い昔に遠いところで起こったことだと、身近に感じていませんでした。だけど、今年流山市平和記念資料館で広島平和記念資料館に行き、広島県に大使として広島平和記念資料館で展示を見たり、被爆体験のお話を聞いたりしたことで、戦争や原子爆弾について恐ろしいと感じるようになりました。

　広島平和記念資料館には、原子爆弾の熱線、放射線、爆風の威力の脅威を知ることができる資料がたくさんありました。その中でも印象に残ったのは、原爆の熱線を浴びて全身の皮膚がただれた人の絵や写真です。黒や濃い色の服は熱線の吸収率が大きく、着物の黒い柄がそのまま皮膚に焼きつきました。爆心地に近いと、衣服は引き裂け、皮膚が垂れ下がりました。それでも黙々と逃げている様子の絵は、言葉にできないくらい衝撃でした。ぼくは黒い服を着ることが多いから、もし原子爆弾が投下されたら内臓まで焼かれてしまうと思い、ゾッとしました。

　放射線の影響も恐ろしくて、原子爆弾が投下されてすぐ起きるものも、時間が経って現れるものもあります。意識があるまま亡くなったというお話や、いつ発症するかわからない病への不安を抱え続けているというお話を聞いて、恐怖でしかないと思いました。

　ぼくは今回の平和大使の活動を通して、一発の原子爆弾が無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生も変えてしまうという悲惨さを学びました。今も、核兵器は世界に約一万四千発以上あるそうです。広島のような出来事を二度と繰り返さないように、次の世代へと伝えて、原子爆弾を使わない平和な未来を作っていきたいです。

「平和大使として学んだこと」

今も生まれている決意

東深井小学校　６年　川上　紗季



日本は世界唯一の被爆国だ。世界の約195の国々は被爆したことがない。その中で核兵器を持つ国が９カ国あり、その数を合わせると１万発を超えている。30mの建物から核兵器を落とすと、土台を残して全てが消失するといった。消えた部分はどこにいったのだろう。消えた部分はあの時、広島でいつも通りの朝を過ごしていた人たちは、何の罪もないのに国籍に関係なく消え去った。それだけ一瞬で破壊する核兵器の被害の大きさは、広島が今に伝えている。

平和祈念式には、世界の120カ国以上の方が参列した。８月６日は、世界に被爆した市として知られる広島が、世界に向けて平和を訴える日だ。平和祈念式で私は、自分と同じ小学６年生が、被爆体験を直接聞ける最後の世代として、後世につなぐ使命を背負うという平和宣言を聞いた。原爆を受けて生きのび、亡くなるまで苦しんだ人がいる。遺された家族がどれほどの悲しみを背負い、思い出したくもない記憶を次世代へと受け継ぎ、傷ついてきているか。一発の原子爆弾が落とされたことを、81年経った今でも忘れることはない。

広島は、０だ。ゼロとは、原爆を落とされた後の広島の街。原爆で被爆して亡くなった人々の願う核兵器の数。たった一発の爆弾によって、体だけでなく心も辛く苦しい日々が始まった。生き残っても、被爆したという理由で馬鹿にされたり、差別を受けたりした。一度の操作。核兵器を脅しや防衛の道具に使うことは、いつも誰かが笑っている日常が壊され、てしまうことにつながる。

参列した広島で、使命を受け継ぐ決意や、各国が国の平和を守るという決意が生まれていた。私は、遠くのことだと思っていた広島が、前よりもずっと身近に感じられるようになった。こども平和サミットのバックの「はっぴーす！」のロゴマークは、幸せで平和な楽しい世界を創っていくという広島のメッセージだ。私も同世代として、一生に一度の経験を心に刻み、自分事として考えていく。



「平和大使として学んだこと」

あの日の原爆

流山小学校　６年　砂川　就仁

「いつもだったら町から見えない浮島が町から見えるようになっていた。」これは、平和サミットで聞いた被爆者の方の言葉です。

「広島県のあの日八時十五分十一秒に原子爆弾が落とされた。爆心地から二キロメートルの建物がすべて吹き飛び、何も無くなって一面焼け野原で、地獄に変わった。」辺り

とも話されていました。

事だと思っていました。

平和大使になる前は、原爆は遠い昔の出来

起こったことが自分とは関係のない事とは思えなくなりました。

けれど、平和大使となり、あの日の広島で

それは、平和記念資料館で悲しい物やその

当時の人々の生きた証をみたからです。

具体的には血の付いたワンピース、黒く焦げた弁当箱などです。

黒く焦げた弁当箱は当時の中学生が使用していた物だと知りました。私も来年には中学

生になります。

自分と年の近い人が原爆亡くなっていること

に大きな衝撃を受けると共に、実際の遺品を見て歴史上の事、昔の出来事で済ませてはいけないことだと思いました。

資料を見て、被爆者の方の話を聞いて、自分と同じ位の年齢の人や大勢の人が亡くなっていることを感じて、もう二度と同じことが起こってはならないと強く感じました。

第三の広島、長崎の様な事を起こさない、また、戦争で傷つく人を作ってはならないと思います。そのためには、被爆された方から話を聞いて、気持ちのバトンを受け継いで、私が次の世代に伝えていかなければならないと思いました。

今後も私は自分が広島で学んだことや、感じたことを周りに伝え、二度とこのような事が世界のどこでも起こらないように平和のバトンを繋いで行こうと思います。

「平和大使として学んだこと」

平和大使として、未来へつなぐバトン

小山小学校　五年　氏名 西野 澪央

私たちは、初日に、広島の平和記念資料館に行きました。私は本当にびっくりしました。焼け野原になった街、ボロボロになった品、黒くこげたお弁当箱。そして実際の写真で見た苦しむ人たちを見て、原ばくがなければこの罪のない人々は、まだ生きていただろうか。と写真を見るたびに思いました。私は初日、とうしました。また、市長の話、子供代表の平和記念資料館で頭がいっぱいになりました。

二日目は、平和記念式典で八時十五分に黙話を聞いて平和への思い、今はまだ戦争をしている国があって平和ではないことをよくかいしました。そして私は、自分でできる平和について考えてみました。それは、けんかイジメをなくすことです。一人でも悲しい思いをしていたら平和ではなくなってしまいます。そのような活動がふえていくと、世界は平和に近づいていけるのではないかと思いました。

平和記念式典が終わったあと、平和サミットに出席しました。そこでは、ひばく者のこうのキヨ美さんに実際原子ばくだんが落下された後のことを、つらいなか一生けん命に伝えてくれました。そこで私は戦争のおそろしさがとてもよく伝わりました。そして私たちはキヨ美さんと、今私たちが伝えてもらったことを、必ず語り続けることを約束しました。私はキヨ美さんの話を聞いてマンガ「はだしのゲン」を思い出しました。ゲンと思じようにキヨ美さんも姉をなくしていたからです。最後に私は正直広島に行くのはそんなにのり気ではありませんでした。さらに小学習のときみんなよりおくれているのに気がつきました。しかし実際に原ばくがとうかされたあとのことを聞いて広島にいってよかったと思いました。

「平和大使として学んだこと」

世界の人々と生きる

長崎小学校　５年　山﨑　朝夏理



八月九日は私の誕生日です。私にとっては、うれしい日ですが、長崎に原爆が落とされた日でもあります。

その事を知り、学校の図書室で戦争や原爆に関する本をたくさん読みました。

戦時中のことや、原爆が落とされた広島や長崎の事をより深く知り、学びたいと思い平和大使に応募しました。

平和記念資料館で観た絵や写真で特に印象に残っているものが二つあります。

一つは、家の下敷きとなった女の子と泣きながら見守る母親の絵です。母親は娘の名前を呼びながら南無阿弥陀仏と唱える事しかできなかったそうです。助けられないことの無力感やもどかしさ、一瞬で世界が一変してしまったんだろうなと、原爆の恐ろしい威力を感じました。

もう一つは、最後に見た人骨の山の写真ですが、記録として写真に残したかったのですが、怖くて写真を撮ることができませんでした。

この写真に写っている犠牲になった一人一人に名前があり、家族がいると思うと胸が苦しくなりました。

子供サミットでは、被爆者の方の話を聞きました。その女性は姉を探しに広島市内に来て、残った放射線で被爆してしまったそうです。私はその話を聞いて、爆撃は逃れても、放射線という目に見えないものによって、さらに多くの被害が出てしまったことを実感しました。

約十四万人もの命を奪った原爆は、この世に存在してはいけない兵器だと改めて感じました。

平和大使を終えた今、平和とは何か考えてみました。

私の考える平和は、戦争がないだけではなく、お腹いっぱいにご飯を食べられること、自由に学んで遊べること、安心して「当たり前」の生活を送れることです。

悲しいですが、世界には私たちの「当たり

前」が、当たり前ではない人達もいます。

この広い世界で、争いをなくすのは難しい事だけど、自分には無関係ではなく、一人一人が関心を持ち、平和について考え続けなくてはいけないと思います。

広島に行ったことで、戦争のこと、平和のことを深く考える機会になりました。

私は争いでつくった平和は、平和ではないと思います。平和のために命を失うのは違うと思うからです。文化や言葉、肌の色が違っても、一人一人が大切な命だから、幸せに生きていて欲しいです。

まず私にできることは、広島で学んだ事や、戦争を経験した人達の、言葉や思いを伝えていくことです。また、人との関わりの中で、考えや意見が違ったとしても、お互いを認め合い、自分の身の周りから、小さな平和を作っていきたいです。

「平和大使として学んだこと」

戦争はダメ。原子爆弾は恐ろしい。

おおぐろの森小学校　５年　山田　梨乃

「平和大使」を終えた今、広島へ行き思ったことが二つある。一つ目は「戦争はしてはいけない」ということ。二つ目は「非核三原則を守る」ということだ。

今回、子ども平和サミットに参加し、被爆者の河野キヨ美さんの話を聞いた。その中で心に残った言葉がある。それは「戦争はダメ。原子爆弾は恐ろしい。」という言葉だ。河野さんは、原爆が広島へ落ちた次の日に広島に向かった。街は残らず消え、黒い焼け野原になっていた。すれちがう人々は、腕から皮膚をたれさげよろよろと歩き、街の中は足の踏み場もないほど死体が転がっていた。その光景は地獄のようだったと教えてくれた。

資料館に原爆ドームの被爆前と被爆後の模型が展示されていた。被爆前は青緑色の美しい洋風の建物だったが、一発の原子爆弾により、骨組みと瓦礫だけになり、茶色く焼き焦げてしまった。悲惨な姿になってしまったことが分かり、悲しい気持ちになった。

河野さんの話を聞いてさらに驚いたことは、戦争中は空襲から逃れるために、小学校高学年の子供達は疎開をし、家族と離れて暮らしていたことだ。死んでしまったら、家族と二度と会えないかもしれないという不安を抱えながら過ごすことは、とても辛かったと思う。

日本は「非核三原則を堅持している。私は、核兵器を「持たず、作らず、持ち込ませず」という三原則を絶対に守っていきたい。

私達は、被爆体験を直接聞くことのできる最後の世代だ。河野さんは戦争の悲惨さを後の世代へ伝えて欲しいとおっしゃっていた。

「絶対に戦争や核兵器のない世界にする」ことを目標に、今回平和大使として学んできたことを周りの人たちに伝え続けていきたい。

「平和大使として学んだこと」

平和大使として学んだこととこれから

東小学校　５年　酒寄　逞助



「平和大使」を終えた今、私が思ったことは原爆は人類とは共存は不可能ということです。

1945年8月6日午前8時15分　1発の原子爆弾が広島のアタリマエを壊しました。

被爆者の皮膚は裂け、服は焼け焦げました。ほとんどの建物は崩れてしまいました。目はゼリーのようにとびだし内蔵が卵焼きのように腹から出ていました。そうならなくても放射能の影響で死んでしまった人もいます。1945年の終わりまでの死者は約14万人だそうです。どうしてそのことを知ったのかというと広島の原爆資料館で被爆者の遺品を見たり被爆者の姿を見たり原爆の恐ろしさを知ったり被爆者の話を聞いたからです。正直言って聞きたくなくなるくらい怖かったです。

このことを知って私は自分にできることは何かと考えました。そして自分にできることと身のまわりの争いをなくすことだと思います。僕がはこの話をいろいろな人に伝えることだと思いきたいです。

これからも広島のことを忘れずに生きてビで平和祈念式典を見てくれて嬉しかったで広島の話をすると家族が興味を持って、テレ

「平和大使として学んだこと」

ヒロシマの心

長崎小学校　５年　佐野　遥真



広島に原爆が落ちた８１年前の８月６日、僕が平和大使として広島に行く前に想像していたより残酷な事が起こっていた。僕は戦争や原爆の事はなんとなく知っていたけれど平和大使として派遣された広島は、戦争や平和について改めて考えるいい経験になった。

僕は広島に行く前、お母さんと一緒に調べてみたら、原爆一つで大きぼな被害があった。

原爆が爆発した瞬間に、約７万人が亡くなった。原爆は熱線、爆風、放射線の３つに分かれていて、熱線は爆心地の温度が約７７００度あり、近くにいた人の衣服は引き裂け、皮膚は垂れ下がるような大やけどを負い、広島のあちこちで火災があった。爆風は建物や人々を破壊し吹き飛ばした。放射線は原爆に含まれる目に見えない物質で原爆投下後に、放射線物質を含んだ黒い雨を降らし、浴びた人々の細胞を破壊した。原爆はたった１度の爆発で多くの人の命を奪った。

平和記念式典に参列した時、人はたくさん

世界を広めて世界中が笑顔になってほしい。

になったら交流会を作って世界中に核のない

向き合っていかなければならない。僕が大人

して、核の無い世界を目標に僕たちが戦争に

爆者のメッセージであると知ってほしい。そ

思いを他の誰にもさせてはならないという被

平和に繋がる。「ヒロシマの心」とはこんな

手の気持ちを考えること、日常の小さな事も

ができたと思う。みんなで協力すること、相

なった。たくさんの力が合わさって今の広島

ぎやかだった８１年前広島は黒い焼け野原に

罪もない人がたくさん亡くなったからだ。に

当たり前だった日常が原爆のせいでなくなり、

なったし、戦争のことを考えると怖くなった。

顔で言っていて、その話を聞いて僕も悲しく

原爆を作るのをやめてほしい。」と泣きそうな

被爆者の話を聞いて「戦争をやめてほしい。

て、大事な式典だと緊張した。サミットでは

鐘が響いた。日本や外国の有名な人が来てい

いたけれど静かだった。広島の町中に平和の

「平和大使として学んだこと」

ぼくの平和への思い

南流山第二小学校　６年　社本　志信



僕が「平和大使」になって体験した中で一番心に残っていることは、平和記念資料館で原爆が落とされた後の広島のまちの写真を見たことです。なぜなら、頑丈な建物以外全て焼けてなくなっているようだったからです。

そして僕は二つのことを思いました。

一つは世界の人々がやるべきことは、原爆の恐ろしさをしっかり理解することだと思います。僕は広島に落とされた原爆は、単なる「怖いもの」だと思っていました。しかし実際は地球上の全てのものを焼きつくしてしまうような、ものすごく「怖いもの」だということを知りました。何一つ罪のない人が亡くなったり、生き残っても無惨な姿になっていたりしました。世界には原爆の本当の恐ろしさを知らない人が多いので、核兵器を持って戦争を始めてしまうのだと思います。

もう一つは、世界中を平和にすることが必要だと思います。今、日本で家族と一緒にいることは、当たり前ではありません。平和は簡単につくれたりするものではありません。平和は当たりまえのおかげでしょうか。平和は当たり前ではありません。手に入ったりするものではありません。

日本は唯一の被爆国で軍隊を持たず戦争を放棄している国だから平和な生活を送れているのだと思います。世界中を平和にすることは難しいことですが、僕たちは世界のみんなのために、そして自分達のために、小さなことからであっても活動を始めることが必要だと思います。そのために僕は学校のみんなに平和大使として学んだことを伝えたいと思います。

僕は八十一年前、一発の原爆でそれまでの生活が全て失われてしまった広島のことを知り、二度と同じことが繰り返されないように、そして平和のあふれた世界になってほしいと思いました。

「平和大使として学んだこと」

本当の平和

おおぐろの森小学校　５年　恒成　海結



たった一発の原子爆弾で、日常生活が消えた。外で作業をしていた中学生、校庭で遊んでいた子供達、仕事や家事をしていた人達。当たり前の毎日をすごしていた人達の命だけでなく、生活もうばわれた。

広島へ行く前に事前学習会で学び、本を読み、原子爆弾は恐ろしいものだということがわかっていたつもりでした。けれども、平和大使として実際に広島へ行き、改めてどう恐ろしいのかを感じることができました。平和記念資料館で、原子爆弾が落とされたしゅんかんを再現した映像やボロボロになった衣服、元が何だかわからないほどの布製品などたくさんのものを見ました。今の自分の生活はとても幸せで、それがいっしゅんで消えてしまったらどうしたらいいのだろうかという思いが生まれました。

「戦争はイヤだ。戦争はきらい。」被爆者の河野キヨ美さんが言った言葉です。河野さんから次の日のお話を聞くことができました。

「平和とは、みんなが持っている幸せ」と言っていたと聞き、ゾッとしました。原子爆弾が落とされたときには生きのびた人たちも、原爆後遺症でかみの毛がぬけてしまう人、顔や体にむらさき色のはんてんが出てしまう人、体中から血が出てしまう人、病気に苦しむ人、亡くなる人も多く、原子爆弾の苦しみは長い間続きました。多くの人々の命や幸せをうばった戦争は私も河野さんと同じでイヤです。きらいです。どうして戦争なんて始めたのだろうと強く思いました。

「助けてください。水をください。」

と言っていたと聞き、ゾッとしました。原子爆弾が落とされたときには生きのびた人たちも、原爆後遺症でかみの毛がぬけてしまう人、顔や体にむらさき色のはんてんが出てしまう人、体中から血が出てしまう人、病気に苦しむ人、亡くなる人も多く、原子爆弾の苦しみは長い間続きました。多くの人々の命や幸せをうばった戦争は私も河野さんと同じでイヤです。どうして戦争なんて始めたのだろうと強く思いました。

態でみんながの死体が転がっていて、足のふみ場もない状

聞くことができました。道ばたにはたくさんの死体が転がっていて、足のふみ場もない状態でみんながの死体が転がっていて、足のふみ場もない状態でみんなが

「平和とは、みんなが持っている幸せ」と言っていたと聞き、ゾッとしました。原子爆弾が落とされたときには生きのびた人たちも、原爆後遺症でかみの毛がぬけてしまう人、顔や体にむらさき色のはんてんが出てしまう人、体中から血が出てしまう人、病気に苦しむ人、亡くなる人も多く、原子爆弾の苦しみは長い間続きました。多くの人々の命や幸せをうばった戦争は私も河野さんと同じでイヤです。どうして戦争なんて始めたのだろうと強く思いました。

「助けてください。水をください。」

と言っていたと聞き、ゾッとしました。原子爆弾が落とされたときには生きのびた人たちも、原爆後遺症でかみの毛がぬけてしまう人、顔や体にむらさき色のはんてんが出てしまう人、体中から血が出てしまう人、病気に苦しむ人、亡くなる人も多く、原子爆弾の苦しみは長い間続きました。多くの人々の命や幸せをうばった戦争は私も河野さんと同じでイヤです。きらいです。どうして戦争なんて始めたのだろうと強く思いました。

「戦争はイヤだ。戦争はきらい。」被爆者の河野キヨ美さんが言った言葉です。河野さんから次の日のお話を聞くことができました。

「平和とは、みんなが持っている幸せ」

結団式で流山市の井崎市長が平和は残念ながら自然に生み出されるものではなく、みんなで作り出すものだと話していました。それを聞いて、ふだんのことを思いうかべました。

たしかにけんかを始めることはかんたんです。

ほしいものを取り合う、意見がちがう、自分にとっての正解がちがうということは私の身の回りにもあります。みんな考え方がちがうからです。

しかし、仲直りをしたりあやまったりすることはかんたんではありません。そんな時、私は、相手の話を聞くことにしています。おたがいになっとくするまで話し合って仲直りをしています。それでもけんかにならない方法を見つける方が大切だと思っています。

自分の家族や友達とも意見が違うことがあるのに、人数が増えたり国がちがったりするのにもっと意見が違うのは当たり前です。力やぼうりょくで解決したら、本当に幸せな結果になるのでしょうか。意見がちがっていてもこれからの

「平和大使」として学んだこと

世界の問題　核兵器廃絶に向けて

向小金小学校　５年　氏名　平野　絢人



原爆によって、どんな苦しみがあったのか、

いったいどのくらいの人が犠牲になったのか、それをしりたかったから、ぼくは、平和大使に応募した。

広島に行く前に、『ぼくは、満員電車の中で原爆を浴びた』という本を読んだ。僕と同じくらいの子が、広電に乗っていて被爆した。この本を読んで、原爆のことをなんとなくわかったつもりだった。

でも、その想像は平和記念資料館の写真と資料の資料の威力がすさまじさを教えてくれた。比べ物にならないほど、皮膚の火ぶくれが破れ、その皮膚が垂れている人や原爆の光で目が見えなくなった人、様々な形ではあるが、いずれにしまった人、原爆が落とされて数年たって原爆症になってしまう人がいることがわかった。写真から原爆はとても恐ろしいことが伝わった。

けれど、実際に被爆せよぼくには想像を絶する痛みや苦しみであることはわかった。

しかし、原爆は全く違っていた。

広島平和記念式典で、広島市長、広島県知事、平和大使、内閣総理大臣の話を聞いた。三人とも核兵器は人類と共存できないという話だった。日本のトップが言っていることなのだから、国際問題であることがわかる。いまだに核抑止力に依存して、脅しに使っている国際社会もある。そんなものは絶対にやめさせないといけない。

ぼくの原爆への思いは、行く前はなんとなく組織も核兵器禁止条約を支持している。

ICANという組織も核兵器禁止条約を支持している。

平和記念式典で、広島市長、広島県知事、

きても、実感はできないと気がついた。

したたくさんの人の苦しみや悲しみは想像することはできても、実感はできないと気がついた。

なぜなら、約十四万人の方をたったその年の年末までに犠牲にしたうえで、生き残った人には一生治らない心と体の傷を負わせたからだ。そんな原爆は絶対に無くさないといけない。

これからの平和を守るために、まずぼくができることは、けんかをしたときに、叩いた

りけったりせず、自分から話し合いで解決できるようにしたい。原爆を知らない人に原爆の凄惨や、悲惨さを伝えたいと思う。

将来は、ぼくたちの次の世代が今のぼくと同じように原爆や戦争を凄惨に思い、この平和を世界へ、未来へつなげていけるように、伝えていきたいと思う。

「平和大使として学んだこと」

争いのない世界のために

小山小学校　６年　藤井　雪乃



「平和大使」を終えた今、私が平和で争いのない世界をつくるために必要だと考えるのは、一人一人が平和について深く考え、行動に移すことです。

平和記念資料館の展示には折れ曲がった鉄骨や、ボロボロに引き裂けた衣服など、言葉を失う物がたくさんありました。たった一つの原子爆弾によって当たり前の日常が失われること、それはもう二度とくり返してはならないと強く思いました。

今も世界中に一万発以上あるとされる核兵器を所持している国は、「核抑止力」によって自国を守るために所持しています。もしその核兵器が使われてしまったらどうなるのでしょうか。原子爆弾の恐ろしさは一瞬でたくさんの人の命を奪い、街を焼け野原にして、生き残った人々の体と心を何年も苦しませることです。このことから、核兵器を無くさないと思います。

平和な世界は実現できないと思いますが、平和な世界は実現できないと思いますが、平和な世界は私たちでつくり上げるものです。最初に書いたように一人一人が平和について深く考え、行動に移すことが争いのない平和な世界をつくるために必要だと考えます。

また、そのことを意識して行動していきたいです。

そして、私たちにも身近にできることはたくさんあると思います。例えば、意見などですれ違いが起こって、対立してしまったりする前にお互いの話をよく聞いて深く考えたり、ニュースなどで世界の出来事や平和について見たり知ったりするなどです。

「平和大使として学んだこと」

僕が平和についてできること

東深井小学校　５年　井上　伊集

「私たちには、被爆体験を直接聴くことのできる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命があります。」

式典後に参加した「全国こども平和サミット」では、被爆者のお話や中高生の平和活動の発表を聞きました。その中で一番心に残ったのは被爆体験記です。原爆投下直後、救護所は、大やけどの人であふれかえっていて、始めに来たはずの患者は診察してもらえず、放置された状態で（当時被爆者に水を飲ませてはいけないといわれていたのに）「水がのみたい」というその患者の望みどおり水を飲ませてあげるとすぐにその人は死んだというお話です。水を飲ませてあげても死んで、飲ませてあげなくても「死」しか待っていなかった

「平和大使として学んだこと」

僕が平和についてできること

東深井小学校　５年　井上　伊集

「私たちには、被爆体験を直接聴くことのできる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命があります。」

式典後に参加した「全国こども平和サミット」では、被爆者のお話や中高生の平和活動の発表を聞きました。その中で一番心に残ったのは被爆体験記です。原爆投下直後、救護所は、大やけどの人であふれかえっていて、始めに来たはずの患者は診察してもらえず、放置された状態で（当時被爆者に水を飲ませてはいけないといわれていたのに）「水がのみたい」というその患者の望みどおり水を飲ませてあげるとすぐにその人は死んだというお話です。水を飲ませてあげても死んで、飲ませてあげなくても「死」しか待っていなかった

「平和大使として学んだこと」

戦争が一切ない世界を願って

鰭ヶ崎小学校　５年　田口　実瑚



私は、平和大使として広島に行きました。

一九四五年八月六日に広島に一発の原子爆弾が落とされたことを私は、初めて知りました。

「まだたくさん生きたかったひともいる」「もっと家族や友達とたのしい時間を過ごしたかった人がいる」。わたしはその人たちにとって、悲しい感情がありました。平和記念資料館で、焼けてしまった服や町そして人々の写真がありました。これらを見た私は「もうこれ以上戦争は起こしてほしくない」と心の中で思いました。これから私は、友達に広島で何が起こったのか、原子爆弾はどれほど恐ろしいのか、戦争は絶対に起こしてはいけない、

この三つを友達に言いたいと思います。

皆さんが思う平和とは何でしょう。多くの人は戦争をなくすと思う人が多いと思います。私が思う平和は、それも平和に繋がります。差別しないで、一人一人が平等に暮らせるような世界だと思います。これを実現するには、核兵器をなくして、みんなが安心して暮らせられるように出来たらいいと思っています。

私はそのために本を読んで知識を深めて、相手の立場や考え方を理解してあげてられる大人になります。

「平和大使として学んだこと」

僕の考える平和

小山小学校　５年　中森　陽

　ぼくは、学校の総合の授業で第二次世界大戦について学び、日本が戦争で原子爆弾を投下された唯一の国だと知り、広島のことをもっと知りたいと思い、流山市平和大使に応募した。

　広島へ行って、一番心に残ったのは原爆ドームだ。原爆ドームを見たとき、当時亡くなった人たちの遺体が積み重ねられたことがあったと知り、とても驚いた。ぼろぼろになって骨組みだけになったドームを見て、当時こにいた人たちはどんな気持ちだったのだろうと考えると、苦しくなった。そして、被爆する前と後の写真を見比べた。丈夫な建物であある公共施設は、半分壊れていたが、崩れたりはしなかった。それ以外の建物は、街ごと吹き飛ばされたという事実に、驚きを隠せなかった。資料館の展示がぼくに最も訴えたことは「広島で起きた悲劇を少しでも多くこれから生まれてくる人々に訴えたい」という当時の人たちの思いだ。

　平和大使としては、原子爆弾の恐ろしさだった。この施設をもっと多くの人に知ってもらうことが大切なものだ。だから、心の中でずっと覚えておかなければいけないと思う。平和大使として学んだことを日頃の生活で生かすことだと思う。例えば、けんかをしてしまったときには、素直に「ごめんなさい」と言えるように努力しようと思った。今回の経験はぼくにとって大切なものの人々の願いがこめられて、つくられた。

　ぼくの毎日は、楽しくて、わくわくする。美味しい食べ物を食べられて、学校へ行って友達と遊べる、それが当たり前だとずっと思っていた。しかし、それは戦争がおきていたら、当たり前ではないことがわかった。「平和大使」を終えてぼくが強く思うことは、あなぜ平和なのかということだ。それは、当時の人たちが「戦争を二度としない」というこを選び、それを今まで続けてきたからではないだろうか。

　平和大使としてのぼくの本当の任務は、広島に行ったことを日頃の生活で生かすことだと思う。例えば、けんかをしてしまったときには、自分が悪いことをしてしまったときには、

して、広島に行ったことで、ぼくは変わった。

それは、戦争の恐ろしさを知り、平和への感謝の気持ちが生まれ、毎日が当たり前ではないことに気づけるようになったことだ。

ぼくが思う平和は、家族そろってご飯が食べられて安心して過ごせることだ。それをかなえるためには、世界中の人々一人一人が戦争の恐ろしさについて知り、どうしたら平和になるかを考え続けることが大切なことなのだと思う。

「平和大使として学んだこと」

「平和」の本当の意味

流山市立長崎小学校　6年　氏名西嶋悠真

僕は、「平和大使」として広島に行って、「平和」という言葉について、今までとは違う見方になりました。

広島では、平和記念資料館に行き、平和記念式典、全国こども平和サミットに参加しました。平和記念資料館には、有名な原爆ドームの被爆する前の模型がありました。被爆する前と後を見比べるととても変わり果てていました。たった一つの爆弾で町一つと当時の人たちの日常が一瞬で吹き飛ばされてしまったということを知って、「こんなことが実際にあったのか。」と思いました。

平和記念式典では、今年原爆の影響で亡くなった4393人の名簿が奉納されました。43と93人と聞き、「平和記念資料館で見たことを実際に体験した人がまた減ってしまったのか。」と思いました。

全国こども平和サミットでは、実際に被爆した直後の広島に行ったという河野キヨ美さんの話を聞きました。当時の広島市は、被爆した人たちが地面を埋め尽くして、とても気味が悪か。たそうです。しかし、帰るころには何も思わなくなってしまう。たといいます。僕は、想像したくないくらい悲惨な広島が頭に浮かんできました。

今までは、平和とは「争いのない世界」だと思っていました。しかし、広島に行って、ただ争いがないだけではなく、「みんなが幸せに暮らせる世界」だと思いました。「平和大使」として広島に行き、広島の悲惨な過去について知りました。当時の広島は、75年間草木も生えないと言われたそうです。しかし、今は広島市民の皆さんの努力が実り、美しい都市に復興しています。当時のことについて知ることで、「本当の平和」に一歩近づくと思いました。

「平和大使として学んだこと」

平和大使を終えた今、私が思うこと。

南流山小学校　５年　細貝　朋香



八十一年前の八月六日に広島へ原子爆弾が投下されました。一瞬にして街は破壊され多くの尊い命が奪われました。

平和大使に応募する前は、戦争についてテレビや本で読んだことはありますが、当時の情況がどれだけ恐ろしいものであったかは想像できませんでした。今回広島での体験は、より深く考える時間となりました。

戦争のことを自分事として学び、印象に残っている事は、被爆体験者の方の話です。その中で竹やり訓練の話がありました。竹やりで敵を倒す訓練を学校でさせられた。竹では機関銃を持っているそうです。竹でも逆らうことが出来ない状況に心が痛みました。

もしれない中、竹やりでしか身を守ることが出来なかったそうです。戦争で自分が死ぬかに勝てる訳がありません。

平和記念資料館には、沢山の写真と当時の物が展示されていました。それらを見ていたら「苦しい」「たすけて」と声が聞こえてくるような気がしました。

広島から帰り、世界が平和になるよう私が出来ることは何だろうと考えました。

それは、広島で聞いた戦争の悲惨な体験の話を絶対忘れないこと。今回の体験を家族や友達に伝える事だと思います。私が出来ることはとても小さなことかもしれません。しかし、小さなことでも広がれば大きな力になると信じて、世界の平和への願いをつなげていきたいです。

今年の平和祈念式典は、過去最多１２３カ国の人達で溢れていました。一分間の黙とうでは会場内の人だけではなく、会場の外でもみんなが黙とうしていたことを帰ってからテレビで知りました。日本だけでなく世界が平和になってほしい強い願いを感じました。私も一分間強く願いました。

広島から帰り、世界が平和になるよう私が出来ることは何だろうと考えました。

それは、広島で聞いた戦争の悲惨な体験の話を絶対忘れないこと。今回の体験を家族や友達に伝える事だと思います。私が出来ることはとても小さなことかもしれません。しかし、小さなことでも広がれば大きな力になると信じて、世界の平和への願いをつなげていきたいです。

「平和大使として学んだこと」

核のない平和な世界を目指して

市野谷小学校　６年　山口　翼



平和大使になる前、戦争は、僕の生活とは遠くかけはなれた存在であり、平和なことは当たり前だと思っていた。ヒロシマに行ってこれまでの考えは、大きく変わった。一番の理由は、原子爆弾の恐ろしさを知ったことだ。

今から八十一年前の八月六日午前八時十五分。原爆がヒロシマの上空に投下され、一度に数えきれないほど多くの命がうしなわれた。

こども平和サミットに参加して、僕は、被爆体験者の方から、原爆の恐ろしさを聞くことができた。原爆投下後のヒロシマは、地獄のようであり、建物は崩れ、人の死体が道を塞いでしまって、足の置き場もないような状態だったという。そして、なんとか建物が残っていた赤十字病院でも、薬がなくなり、治療ができないまま死んでいく人もたくさんいたそうだ。当時の惨状がうかがえる。

もし、僕の二人の弟が突然どこにいるかわからなくなってしまったら、真っ先に探しにいくと思う。でも、そこに死体の山があったら、言葉にならない衝撃で前も見れないだろう。そう考えると、原爆の本当の恐ろしさが伝わってくる。

この夏、僕は、平和大使としての経験を通して、もう二度と核兵器は、使われてはいけないものだと知った。僕は被爆体験者から聞いたことを忘れず、ヒロシマの方々の平和への強い思いを胸に、大人になっていきたいと思う。

「平和大使として学んだこと」

平和は誰が何をすれば作れるのか

おおぐろの森小学校　５年　小矢　穂尚



「平和大使」を終えた今、私は広島の悲惨な出来事や、その後の取り組み、今の世界の状況について知りました。

一九四五年八月六日、広島中心部の相生橋を狙って原爆が投下され、投下された場所から半径一キロメートルの場所で建物が全焼、全壊し、建物として機能しなくなるまでひどい状況に陥ってしまったこと、人は皮膚がただれ落ち、体は裂け、一部の人は内臓が体の外に出てしまう人もいたのだと、非常に驚きました。また原爆は、一般の市民を深く傷つけ、命も奪ってしまいました。それだけでなく、原爆がなければ失うことのなかった時間や未来、人の活躍を一瞬にして壊し、取り返しのつかない事態に変えてしまいました。

このだれも望んでいない状況を絶対に起こさないために、たくさんの人でグループを組み、核のない世界を求め、平和を尊重する人もいると知りました。しかし、これと反対に核実験をたくさん行い、自国だけを強くしても、他国を脅す国もいます。核は、国を守るために使うものではありません。他国を一生傷つけ、勝手に奪う無意味な争いを起こしてしまいます。

平和学習を通して、私が感じたことがあります。平和は誰かから与えられるものではなく、世界のみんなで協力して作るものです。

時には対立が起こることがありますが、自分の意見だけを主張するのではなく、お互いの意見も尊重し、言い合いにならないようにすることが大切だと感じました。これは、身近な人との会話や、平和について考えることも大切です。これらは、とても小さなことですが、「小さなことだから意味がない」ではなく、小さなことを重ねれば大きな力になるということ、小さな力は大きな力のもとになるということを大切にしたいです。

「平和大使として学んだこと」

広島で学んだ戦争のこと

小山小学校　５年　坂本　実優



「平和大使」を終えた今、私は平和が「当たり前」ではないことがわかりました。

広島への原爆投下から八十一年が経ちました。私は、今まで戦争のことも知らず、戦争のことを知っている人が周りにもいなかったので、戦争が身近ではありませんでした。

ですが今回、平和大使となり、事前勉強や、VRで学んでから実際に広島へ行き、戦争のことを前よりも考えることが多くなりました。

平和記念資料館で見た焦げたお弁当箱や制服、三輪車などを見て、どの人もみんな当たり前の毎日を過ごしていたのだろうと思いました。けれどたった一発の原子爆弾がそんな人々の人生、生活を地獄に変えたということを知り、戦争がどんなものかということを知らなくて残酷だと思っていたのだろうと思いました。被爆者はもっとつらくて、怖いなと思いました。

平和記念式典に参加し、平和への誓いを立てました。

平和大使として、被爆者の思いと、戦争は絶対やってはいけないと伝えていきたいと思います。

「戦争は始めたくなかったら始められるけれどやめたいと思ってもやめられるもので、一度とこんな思いを誰にもさせてはいけない」、「もう二度というお話が心に残っていますし、ものかということを学びました。だからこそ、戦争は何があってもやってはいけないということだけではなく、被爆者の思いも平和大使として引き継いでいかなければならないと思っています。

でもいろいろな人の話を聞き、戦争がどんな

「平和大使として学んだこと」

伝え聞く原爆が私に語るもの

江戸川台小学校　６年　常木　咲良

広島の街はとても暑く、息苦しかった。調べると、原爆が投下された日、広島の朝の気温は２６．７度、湿度は６９％とムシムシしていた。つまり今日、広島平和記念式典当日、朝の気温は２７．７度、湿度は８０％と蒸し暑かったそうだ。そして８１年後の２０２６年、広島の街は２６．７度、湿度は２６％と、原爆が投下された日とは全く違う事に驚いた。原爆ドームは今でも放射化し、復興は大変だったはずなのに人口１００万人を超える都市になった事に驚いた。原爆ドームは今でも放射線が出ているのか、どれだけの期間放射線が残っているのか疑問に思ったので調べてみた。すると初期放射線は爆発後１分以内に放出された。爆心地から１キロメートル以内で浴びた人々は人体に致命的な影響を受け生き残っても数日以内には亡くなった。爆風、熱線に加えて放射線だ。恐ろしい。原爆を落とされた時は大体同じ体感というこだ。平和記念公園に行った広島の街と、原爆が落とされた時は歩いていくだけでも汗が吹き出し、暑い日差しで辛いのにこんな中、原爆を落とされたと思うと、とても苦しかった。暑い広島の街を長く沢山歩いて、大やけどを負っているのに十分な手当もしてもらえなく亡くなっていった人たちのことを思うと心が痛かった。

今回広島の街を歩いてすごいなと思ったことがある。資料館で見た原爆後の街は、焼け野原になって何も無い風景だったが、１年後、１０年後の写真からみる復興の速さ、そしてビルやホテルなど様々な建物が建っていた。放射線の影響で地面なども放射化し、復興は大変だったはずなのに人口１００万人を超える都市になった事に驚いた。原爆ドームは今でも放射線が出ているのか、どれだけの期間放射線が残っているのか疑問に思ったので調べてみた。すると初期放射線は爆発後１分以内に放出された。爆心地から１キロメートル以内で浴びた人々は人体に致命的な影響を受け生き残っても数日以内には亡くなった。爆風、熱線に加えて放射線だ。恐ろしい。原爆を落とされた時は大体同じ体感というこだ。平和記念公園に行った広島の街と、原爆が落とされた時は歩いていくだけでも汗が吹き出し、暑い日差しで辛いのにこんな中、原爆を落とされたと思うと、とても苦しかった。暑い広島の街を長く沢山歩いて、大やけどを負っているのに十分な手当もしてもらえなく亡くなっていった人たちのことを思うと心が痛かった。

今回広島の街を歩いてすごいなと思ったことがある。資料館で見た原爆後の街は、焼け野原になって何も無い風景だったが、１年後、１０年後の写真からみる復興の速さ、そしてビルやホテルなど様々な建物が建っていた。放射線の影響で地面なども放射化し、復興は大変だったはずなのに人口１００万人を超える都市になった事に驚いた。原爆ドームは今でも放射線が出ているのか、どれだけの期間放射線が残っているのか疑問に思ったので調べてみた。すると初期放射線は爆発後１分以内に放出された。爆心地から１キロメートル以内で浴びた人々は人体に致命的な影響を受け生き残っても数日以内には亡くなった。爆風、熱線に加えて放射線だ。恐ろしい。原爆を落とされた時は大体同じ体感というこだ。平和記念公園に行った広島の街と、原爆が落とされた時は歩いていくだけでも汗が吹き出し、暑い日差しで辛いのにこんな中、原爆を落とされたと思うと、とても苦しかった。暑い広島の街を長く沢山歩いて、大やけどを負っているのに十分な手当もしてもらえなく亡くなっていった人たちのことを思うと心が痛かった。

今回広島の街を歩いてすごいなと思ったことがある。資料館で見た原爆後の街は、焼け野原になって何も無い風景だったが、１年後、１０年後の写真からみる復興の速さ、そしてビルやホテルなど様々な建物が建っていた。放射線の影響で地面なども放射化し、復興は大変だったはずなのに人口１００万人を超える都市になった事に驚いた。原爆ドームは今でも放射線が出ているのか、どれだけの期間放射線が残っているのか疑問に思ったので調べてみた。すると初期放射線は爆発後１分以内に放出された。爆心地から１キロメートル以内で浴びた人々は人体に致命的な影響を受け生き残っても数日以内には亡くなった。爆風、熱線に加えて放射線だ。恐ろしい。原爆を落とされた時は大体同じ体感というこだ。平和記念公園に行った広島の街と、原爆が落とされた時は歩いていくだけでも汗が吹き出し、暑い日差しで辛いのにこんな中、原爆を落とされたと思うと、とても苦しかった。暑い広島の街を長く沢山歩いて、大やけどを負っているのに十分な手当もしてもらえなく亡くなっていった人たちのことを思うと心が痛かった。

今回広島の街を歩いてすごいなと思ったことがある。資料館で見た原爆後の街は、焼け野原になって何も無い風景だったが、１年後、１０年後の写真からみる復興の速さ、そしてビルやホテルなど様々な建物が建っていた。放射線の

影響で地面なども放射化し、復興は大変だったはずなのに人口１００万人を超える都市になった事に驚いた。原爆ドームは今でも放射線が出ているのか、どれだけの期間放射線が残っているのか疑問に思ったので調べてみた。すると初期放射線は爆発後１分以内に放出された。爆心地から１キロメートル以内で浴びた人々は人体に致命的な影響を受け生き残っても数日以内には亡くなった。爆風、熱線に加えて放射線だ。恐ろしい。原爆を落とされた時は大体同じ体感というこだ。平和記念公園に行った広島の街と、原爆が落とされた時は歩いていくだけでも汗が吹き出し、暑い日差しで辛いのにこんな中、原爆を落とされたと思うと、とても苦しかった。暑い広島の街を長く沢山歩いて、大やけどを負っているのに十分な手当もしてもらえなく亡くなっていった人たちのことを思うと心が痛かった。

今回広島の街を歩いてすごいなと思ったことがある。資料館で見た原爆後の街は、焼け野原になって何も無い風景だったが、１年後、１０年後の写真からみる復興の速さ、そしてビルやホテルなど様々な建物が建っていた。放射線の

２日目の平和祈念式典「平和への誓い子ども代表」で心に残った言葉がある。「私たち

はない、ということがわかった。

と変わりなく、人の体にも影響を与えること

でもあるごくわずかな放射線「自然放射線」

進んだという。そして現在は、地球上どこに

ら１ヶ月後、台風による大雨で天然の除染が

させ発病したり、亡くなったりした。原爆か

長時間留まり、助けに入った人たちをも被爆

景色がそこには広がっている。残留放射線は

た。爆風、熱線に加えて放射線だ。恐ろしい

響を受け生き残っても数日以内には亡くなっ

直接放射線を浴びた人々は人体に致命的な影

出された。爆心地から１キロメートル以内で

た。すると初期放射線は爆発後１分以内に放

地表に残ったのか疑問に思ったので調べてみ

化されているのか、どれだけの期間放射線が

なった事に驚いた。原爆ドームは今でも放射

たはずなのに人口１００万人を超える都市に

影響で地面なども放射化し、復興は大変だっ

には、被爆体験を直接聞くことのできる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命があります。」とあった。その中の「被爆体験を直接聞くことのできる最後の世代」という言葉を聞き、これからは私たちが次の世代に伝え、つなげていかなければならないと思った。子どもサミットで被爆者の河野キヨ美さんから直接聞くお話は私の心へストンと落ちてきた。ご本人から聞くことの大事さが分かった。

広島へ行く前の私は、戦争について「昔のこと」「どこか遠い国のこと」のように考えていた部分があった。しかし、今回の体験を通して、平和はだれかが用意してくれるものではなく、私たち一人ひとりが守っていかなければならない大切なものだと強く感じた。

そして、今の平和を作ってくれた先人への感謝も生まれた。流山市に帰ってきた今、平和大使としての本当の役割が始まる、と私は思っている。広島で見て、聴いて、感じた原爆の恐ろしさや平和の有難さを、学校の友達や家族に自分の言葉でしっかりと伝えていきたい。そして、身の回りの人を大切にすることから、小さな平和を一歩ずつ広げていきたい。

私はこの日を忘れない。これからは毎年、黙祷を捧げていきたい。

「平和大使として学んだこと」

平和への道

おおたかの森小学校　６年　戸部　芙美

広島・長崎に原子力爆弾が落とされてから、八十一年が経ちました。昔の出来事ではありません。つい最近の出来事です。私は昨年、長崎の原爆資料館を訪れました。そして今年、平和大使として広島を訪れて感じた事は、「核兵器がない世界を作るためには、教育が重要なのではないか？」という事です。

私は、広島や長崎に原爆が落とされて多くの民間人が一瞬にして命を奪われ、生き残ってもひどい後遺症で苦しめられたという事は知っていました。しかし、核兵器の恐ろしさや平和の大切さについては、今まで深く考えた事はありませんでした。被爆地二か所を訪れて新たに分かった事が三つあります。

それは、広島と長崎ではそれぞれ違う原爆が落とされたという事。アメリカが原爆を完成させてから、たった二十一日で日本に落とされてしまったという事。核兵器がなぜ一時的に七万発以上も作られることになってしまったのかという事です。

原爆が開発されてすぐに二種類の原子力爆弾が日本に落とされてしまったのは、人体実験だったのではないかと考えました。現代では人体実験などあり得ない事だと思いますが、少し前までは当たり前にあった事かもしれません。また、現在約一万二千発の核兵器が世界では九か国が核兵器を保有しています。

今も核兵器を持った国々が戦争を行っていて、更に驚いたのは、戦時中の日本でも核開発が行われていたという事です。現在日本は、核兵器をもたない国ですが、もし核開発が成功していれば、核保有国になってしまっていたという事に驚きました。

今も核兵器を持った国々が戦争を行っていて、分の国を守る事」なのだと理解できました。ますが、この言葉がまさに「核を持つ事で自などで「核抑止力」という言葉をよく耳にし今も核兵器への依存は続いています。テレビあった一九八六年よりだいぶ減っていますが、作り続けた結果だとわかりました。七万発もの中に存在するのは、国々が自国を守る為にせん。また、現在約一万二千発の核兵器が少し前までは当たり前にあった事かもしれまは人体実験などあり得ない事だと思いますが、験だったのではないかと考えました。現代で弾が日本に落とされてしまったのは、人体実原爆が開発されてすぐに二種類の原子力爆

いつ核が使用されるかわからない不安定な状況に陥っています。この不安定な状況を変える為には、世界中の人々が平和の大切さをつないでいく事が大切だと思います。過去の悲惨な出来事を繰り返さない為にも、それぞれの国が核の悲惨さや核の恐ろしさを伝える教育をしていく事が世界の平和へとつながると思います。私も平和大使として得た「平和への気持ち」を身近な人から伝えていきたいと考えています。

「平和大使として学んだこと」

「平和」について改めて考えさせられた平和大使

流山小学校　６年　中村　寿太朗

僕はもともと原爆のことは知っていたが、原爆が投下、炸裂した結果戦争に関係ない人々が無差別に死んだり、苦しむことになったことが、改めて悲惨だと感じました。平和記念資料館では、焼け焦げたお弁当箱と変形した水筒、テツ君の三輪車と鉄兜など目を背けたくなる物や絵が目に飛び込んできました。平和記念式典では、松井市長の話を聞いて、核拡散防止条約の再検討会議では過去二回に続き成果文書が不採択になり、その原因は「他国に責任を転嫁し、自国の行動を正当化するための為政者（いせいしゃ）の言動にある」との言葉に対して、その通りだなと思いました。また、国連事務総長の「８１年前この地が炎に包まれた経験から、私たちは何か学んだのでしょうか？」、「人類は平和な未来を選ぶのでしょうか？」、「それでも、これは人類が核兵器で人を無差別に殺害した結果なので、これらは目を背けてはいけないこの世界の汚点を象徴するものだと感じました。もし自分が原爆の被害にあった場合、その直後であれば「お水が欲しい」と願った後には「なんで、原爆を落としたのだろう？」と考えると想像しました。また、少し時間が経って想像しました。

被爆死した人たちは、核兵器の餌食になる人は我々で終わってほしい、と願っていると共に、核兵器の仕組みや怖さは知っていて無い方がよい兵器であるため、核兵器をなくせる」と考えている人や「核兵器は使われない」と信じている人がいますが、広島・長崎の核反対運動により、世界で核兵器を持っている国が徐々に減っていることを新しく知りました。徐々に減らせるということと、世界中で同時に核を放棄すれば核兵器のない世界が実現できるのでは、との希望が持てました。が、平和記念式典では、松井市長の話を聞いて、核拡散防止条約の再検討会議では過去二回に続き成果文書が不採択になり、その原因は「他国に責任を転嫁し、自国の行動を正当化するための為政者（いせいしゃ）の言動にある」との言葉に対して、その通りだなと思いました。また、国連事務総長の「８１年前この地が炎に包まれた経験から、私たちは何か学んだのでしょうか？」、「人類は平和な未来を選ぶのでしょうか？」、「それでも、これは人類が核兵器で人を無差別に殺害した結果なので、これらは目を背けてはいけないこの世界の汚点を象徴するものだと感じました。もし自分が原爆の被害にあった場合、その直後であれば「お水が欲しい」と願った後には「なんで、原爆を落としたのだろう？」と考えると想像しました。また、少し時間が経って想像しました。

被爆死した人たちは、核兵器の餌食になる人は我々で終わってほしい、と願っていると共に、核兵器の仕組みや怖さは知っていて無い方がよい兵器であるため、核兵器をなくせる」と考えている人や「核兵器は使われない」と信じている人がいますが、広島・長崎の核反対運動により、世界で核兵器を持っている国が徐々に減っていることを新しく知りました。徐々に減らせるということと、世界中で同時に核を放棄すれば核兵器のない世界が実現できるのでは、との希望が持てました。が、平和記念式典では、松井市長の話を聞いて、核拡散防止条約の再検討会議では過去二回に続き成果文書が不採択になり、その原因は「他国に責任を転嫁し、自国の行動を正当化するための為政者（いせいしゃ）の言動にある」との言葉に対して、その通りだなと思いました。また、国連事務総長の「８１年前この地が炎に包まれた経験から、私たちは何か学んだのでしょうか？」、「人類は平和な未来を選ぶのでしょうか？」、「それでも、これは人類が核兵器で人を無差別に殺害した結果なので、これらは目を背けてはいけないこの世界の汚点を象徴するものだと感じました。もし自分が原爆の被害にあった場合、その直後であれば「お水が欲しい」と願った後には「なんで、原爆を落としたのだろう？」と考えると想像しました。また、少し時間が経って想像しました。

被爆死した人たちは、核兵器の餌食になる人は我々で終わってほしい、と願っていると共に、核兵器の仕組みや怖さは知っていて無い方がよい兵器であるため、核兵器をなくせる」と考えている人や「核兵器は使われない」と信じている人がいますが、広島・長崎の核反対運動により、世界で核兵器を持っている国が徐々に減っていることを新しく知りました。徐々に減らせるということと、世界中で同時に核を放棄すれば核兵器のない世界が実現できるのでは、との希望が持てました。が、平和記念式典では、松井市長の話を聞いて、核拡散防止条約の再検討会議では過去二回に続き成果文書が不採択になり、その原因は「他国に責任を転嫁し、自国の行動を正当化するための為政者（いせいしゃ）の言動にある」との言葉に対して、その通りだなと思いました。また、国連事務総長の「８１年前この地が炎に包まれた経験から、私たちは何か学んだのでしょうか？」、「人類は平和な未来を選ぶのでしょうか？」、「それでも、これは人類が核兵器で人を無差別に殺害した結果なので、これらは目を背けてはいけないこの世界の汚点を象徴するものだと感じました。もし自分が原爆の被害にあった場合、その直後であれば「お水が欲しい」と願った後には「なんで、原爆を落としたのだろう？」と考えると想像しました。また、少し時間が経って想像しました。

被爆死した人たちは、核兵器の餌食になる人は我々で終わってほしい、と願っていると共に、核兵器の仕組みや怖さは知っていて無い方がよい兵器であるため、核兵器をなくせる」と考えている人や「核兵器は使われない」と信じている人がいま

すが、いま本気にならないと取り返しのつかないことが起こると考えさせられました。

「平和大使」として広島に行ったことで、小3の頃は核兵器や戦争は「昔のことだ」と考えていましたが今では、自分事のように考えることができるようになりました。平和記念資料館や原爆ドームでは、移動による疲れを感じていましたが、この悲惨な状況を知らせたいとの一心で疲れも忘れていました。また、みんなには、ウクライナやガザ地区などの悲惨な戦場から目を背けないで、その現実と向き合って自分のこととして考えてほしいと願っています。

「平和大使として学んだこと
今を生きる私たちができること

八木南小学校　５年　松尾　知薫

美しい広島で戦争について聞いた話や見たものは、恐怖で耳をふさぎたくなるような、目をおおいたくなるような、恐ろしいものばかりだった…。

あの日、広島で起きた出来事「原爆投下」。これは、たくさんの人々の大切な命や当たり前の日常を一瞬でうばっていった。広島市内には、いたるところに死体があり、川に流された死体もあった。電車の中には、つり革をつかんだままちぎれた手があった。「水をください」というようめき声がした。けがをした人を助けたいのに薬がなく、ただ寝かせるしかなかった。どんなに恐ろしく、悲しかったことだろう。

被爆者の方々は、当時を思い出すのも辛く悲しいはずなのに私たちに丁寧に真剣に体験を伝えてくださった。想像していたよりずっと残酷で恐ろしい話だったけれど、知らなかったことがたくさんあり、とても考えさせられた。

八十一年後の今を生きている私たち、唯一の被爆国である日本に住む私たちができることは、まずこの悲惨な出来事を知るということだ。それこそが平和につながる大きな一歩だと思う。

被爆者の方の話で「対立より対話」という言葉があった。相手のことも自分のことも良く知ってから対等な立場で対話ができれば、悲しい争いを減らすことができるのではないか。一人では難しいかもしれないけれどみんなで考え、対話ができれば変わると思った。

だから、私は平和大使として同世代の多くの人たちに伝えたい。原子爆弾の恐怖や与える痛みを。武力による紛争をなくすため。全世界の人々と平和の尊さを分かち合うため。

「げんしばくだんがおちるとひるがよるになる」当時小学校三年生だった方の詩の中の一節だ。こんなにも悲しい出来事を二度と繰り返さないために。

恒久平和を強く願います。

令和８年度平和大使

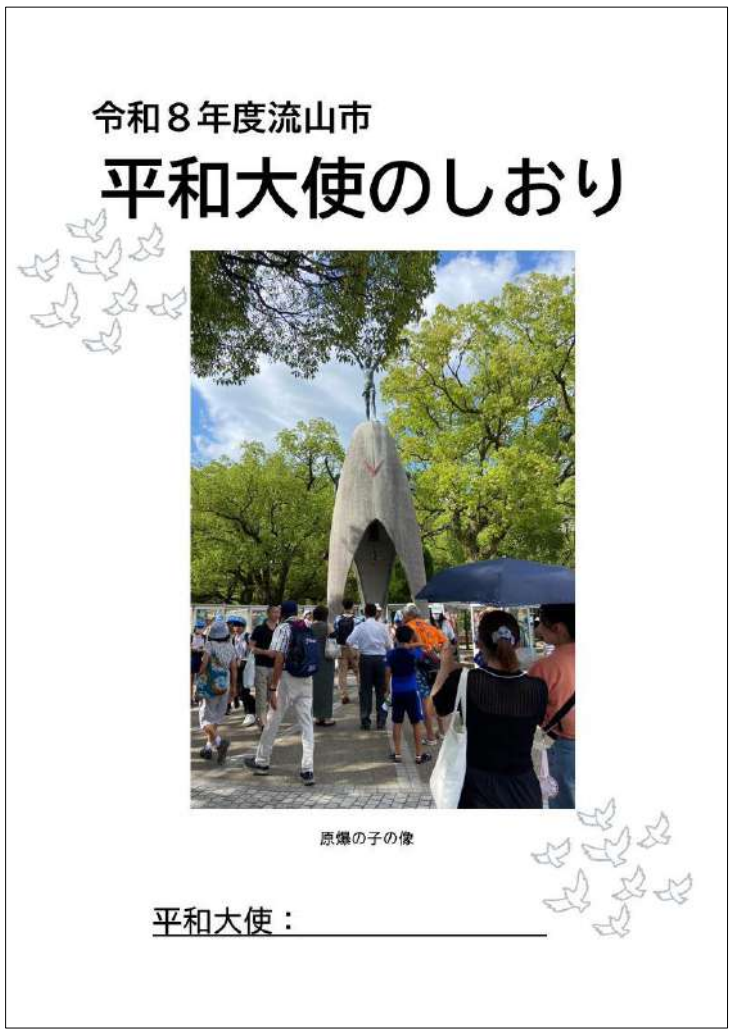
活動報告



平和記念公園内　平和の鐘にて

※この活動報告は、平和大使としての一連の活動を担当者の目線から報告するものです。

平和大使事前学習会


令和８年度流山市

平和大使のしおり

原爆の子の像

平和大使：＿＿＿＿＿＿＿＿

令和８年７月１１日（土）に、平和大使事前学習会を行いました。

事前学習会では、その年度の平和大使が一同に会し、お互い自己紹介をした後、広島に派遣されるにあたっての注意事項の確認や過去に広島で起きたことに関する事前学習などを行いました。

ほとんどの平和大使はお互い初対面。学習会が始まる時は緊張している子も多かったですが、終わる頃にはどの班も打ち解けていました。

平和大使結団式

令和８年７月３１日（金）に、平和大使結団式を実施しました。

児童たちは市長からは任命証を、教育長からは千羽鶴をそれぞれ受け取り、正式に平和大使として任命されました。

井崎市長からは、「どうしたら平和を創ることができるか考えてほしい」との激励の挨拶がありました。平和大使はそれぞれ真剣な面持ちで話を聞いていました。

いよいよ、広島派遣の日がやってきます。





広島派遣（１日目）

令和８年８月５日（水）、ついに広島派遣の日。

広島までは新幹線で約４時間。新幹線の中では班ごとにそれぞれ親交を深めていました。広島に到着した後は、ホテルに荷物を預けて平和記念資料館を見学しました。

平和記念式典前日の資料館は世界中から多くの人が訪れており、先に進むのが困難なほど。現在でも世界的な関心ごとの一つであることが伺えます。

平和大使たちも多くの大人たちに混じりながら資料を見つめ、それぞれが感じたことをメモにまとめていました。

平和祈念資料館を出た後は、市民の皆様からお預かりした千羽鶴を原爆の子の像に献納しました。

既に多くの鶴が献納されているのを見て、世界中から平和への祈りが集められる場所なのだということを改めて感じました。











広島派遣（２日目）



一夜明けた８月６日（木）、平和大使たち広島平和祈念式典に参加するため、朝５時に起床し、各々準備を行いました。

この日、平和記念公園の入り口は厳戒態勢が敷かれていましたが、中に一歩足を踏み入れると、公園は昨日とは違った厳粛な空気に包まれていました。

式典では、広島市のこども代表が、平和への誓いを宣言しました。自分と同年代のこどもによる宣言は刺激になったのか、平和大使たちそれぞれが真剣に聞き入っていました。

式典終了後は、第２回全国こども平和サミットに参加しました。特に、被爆者による被爆体験講話は、平和大使たちにとって衝撃的だったようで、前日から活動していて疲れているにも関わらず、各々が真剣に話を聞いていた姿が印象的でした。

平和サミット終了後、全ての行程を終えた平和大使たちは帰路につきました。大使としての重責から解放された児童たちは、新幹線内では行きと同様に楽しそうに親交を深めていました。







平和大使報告会

８月２１日（金）、平和大使たちはクリーンセンターの研修室に集まりました。

この日は、広島派遣で学んだことを市長と教育長に報告する平和大使報告会の日です。報告会に入る前には、広島で感じて、考えてきたことを共有するためのグループワークを行いました。

グループワークでは、班ごとに広島で感じたことを自由に出し合い、「平和の木」を作った後、各班で一つテーマを選び、それに基づいた「平和への誓い」を考え、それぞれ発表しました。

報告会では、平和大使の代表者２名が市長・教育長の前で作文の朗読を行ったほか、グループワークで考えた「平和への誓い」を市長・教育長に発表しました。

発表の後は、市長・教育長と平和大使による懇談の時間。またとない機会に緊張気味な大使たちでしたが、積極的に自分の意見を発言している姿が印象的でした。

最後の挨拶で教育長からは、「戦争を解決することは難しい。日常生活に置き換え、クラスや学年内でいざこざが起きた時は、今ここにいる４８人が先頭に立って解決していってくれたら嬉しい。それが広島に行った成果となる。」と、期待に満ちた挨拶がありました。







◆流山市の平和に関する取組

平和都市宣言

私たちは、平和と繁栄を市民憲章にうたい、「豊かで活力ある文化都市」流山の実現をめざしている。

私たちの国は、世界でただひとつの被爆国として、広島・長崎のいたましさと被爆者の苦しみをすべての人びとに訴え、人類共通の願いである恒久平和を達成させなければならない。

私たちは、日本国憲法の平和精神にのっとり、武力による紛争をなくし非核三原則をまもり、すべての核兵器をすてることを訴え、世界平和確立のため、ここに平和都市を宣言する。

昭和62年1月1日流山市

平和の像



流山市は、昭和62年1月1日、市制施行20周年を迎え、これを契機に平和都市を宣言しました。

そのおり、朝倉家御遺族の御理解のもとに東京都台東区から朝倉文夫作「姉妹」像の寄贈を受け、これを、「平和の像」として市役所庁舎前のプラザの一画に建立しました。

本作品は、朝倉翁が昭和22年、戦いが終わり平和の喜びを心に秘めて制作したものと言われており、本市が願う世界恒久平和のシンボルとして、永く後世に伝えるものです。

平和施策事業

流山市では、以下の平和施策に関する事業を毎年展開しています。

・平和大使事業
・平和ポスター展
・千羽鶴の送呈
・ユニセフ平和教室

OFF SHOT

仲間と一緒に元気いっぱい！





















夕食はお好み焼きでした！









令和８年度流山市平和施策事業
作文集「平和大使として学んだこと」

発行：令和８年９月
発行者：流山市
編集・流山市総合政策部企画政策課